

中川健一メッセージシリーズ

『出エジプト記』1回～20回 メッセージアウトライン

～ メッセージ CD を聴く方のためのガイドブック ～

(このアウトラインだけをお読みになっても、十分に意味を理解することはできません。)

ハーベストフォーラム東京
『定例会』メッセージ

2009年11月～2010年4月



ハーベスト・タイム・ミニストリーズ

In association with Ariel Ministries

Reference: "The Book of Genesis"

Ariel's Bible Commentary Series by Dr. Arnold G. Fruchtenbaum

定価 1,000 円
(税抜 952 円)

(無断複製・転載を禁じます)

【出エジ1】出エジプト記1章1節～22節

「迫害を受けるイスラエルの民」

イントロ：

1. 文脈の確認

- (1) 創世記は、光と命から始まり、死と闇で終わった。
- (2) アダムの罪と、罪の広がりがある原因である。
- (3) 神は解決策を用意された。
 - ① アブラハムの選び (アブラハム契約)
 - ② イサク、ヤコブ、ヨセフに与えられた数々の約束
- (4) エジプトで約400年間奴隷となる。偶像礼拝の影響を受ける。
(例話) 10月28日、鳩山由紀夫首相の所信表明演説に対する各党の代表質問
 - ① トップバッターは自民党の谷垣禎一総裁
 - ② 民主党の衆院選マニフェストを踏まえ、「鳩山内閣は内政・外交、象徴的には日本郵政の人事にいたるまで、約束違反・言行不一致ばかり」と批判。
- (5) 出エジプト記のテーマは、神はマニフェストを実行されるか、である。

2. 名称

- (1) 日本語で出エジプト記
- (2) ギリシア語で Exodos、英語で Exodus
- (3) ヘブル語で「ヴァエレー・シュモット」(さて、これらが名前である)

3. 出エジプト記は、解放の書である。

- (1) すべての解放の型がここにある。
- (2) イスラエルの歴史における解放
 - ① バビロン捕囚からの解放
 - ② 20世紀のイスラエルの建国
 - ③ 1990年代の旧共産圏からのユダヤ人の祖国帰還
- (3) イエスによる霊的解放
- (4) メシアニック・ジューの登場により、2重の意味で、私たちの解放の物語となってきた。

4. メッセージのアウトライン

- (1) 創世記のまとめ (1:1～7)

- (2) 苦役に苦しむイスラエルの民(1:8~14)
- (3) 民族抹殺におびえるイスラエルの民(1:15~22)

5. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 反ユダヤ主義の源流
- (2) 解放の必要性
- (3) 解放の先にあるもの

このメッセージは、現代の出エジプトについて学ぶためのものである。

I. 創世記のまとめ(1:1~7)

1. 「ヤコブから生まれた者の総数は70人であった」

- (1) 使徒7:14では、その総数は75人となっている。
- (2) 死海写本、七十人訳がそうになっている。
- (3) ヨセフには5人の孫が生まれた。その5人を加えると、75人になる。
- (4) 70という数字は、象徴的なもの。完全数。
 - ① 70人から、地上の民族を祝福する民が出現する。
 - ② 祝福を受ける諸国民は、70である(創10章のセム、ハム、ヤペテの子孫たち)。

2. ヨセフもその兄弟たちも、その時代の人々もみな死んだ。

- (1) リーダーシップがなくなった。
- (2) 彼らは迫害が起こる前に亡くなった。
- (3) 彼らはシェケムに葬られた(使7:16 ステパノのメッセージ)
- (4) なぜ400年もとどまったのか。
 - ① 創15:13~15「エモリ人の咎が、そのときまで満ちることはないから」
 - ② エモリ人とは、カナン人を総称した言葉である。
 - ③ イスラエル人によるカナン征服には、神の裁きとしての側面がある。

3. イスラエル人はおびただしく増えた。

- (1) エジプトにおいても、アブラハムへの約束は有効であった(創15:5)。
- (2) 神の守りがあった。
 - ① 70人から200万人に
 - ② バビロン捕囚でも
 - ③ 紀元70年以降の世界離散でも

II. 苦役に苦しむイスラエルの民(1:8~14)

1. 「さて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった」

(1) 「王」 = 「パロ」

- ①パロとは、「偉大な宮殿」という意味。
- ②パロはエジプトの神々の最高峰であり、絶対的な権威を持っていた。

(2) 出エジプト記には2人のパロが登場する。

- ①モーセが誕生した時のパロ
- ②出エジプト時のパロ

2. 時代背景について

(1) 外部から侵入して来た異民族がエジプトを支配した時代

- ①第16王朝、第17王朝時代
- ②ヒクソス王朝(前1650~1550年)「羊飼いの王たち」
- ③エジプト人はハム系、ヒクソスはセム系。
- ④ヒクソス王朝は、セム系の移民を歓迎した。
- ⑤この時代に、ヨセフは宰相となり、ヤコブの一家がエジプトに下った。

(2) ヒクソス王朝から第18王朝への変化

- ①エジプト人による支配が回復された(前1540年)。
- ②第18王朝は、セム系の人々を疑いの目で見つめた。
- ③これで、イスラエル人を迫害する人種的、宗教的背景が整った。

(3) 新しい王朝(第18王朝)の初代の王(アフモス1世)

3. 迫害の理由

「さあ、彼らを賢く取り扱おう。彼らが多くなり、いざ戦いというときに、敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くといけないから」

- (1) 「敵側」とはヒクソク王朝の残党
- (2) 「この地から出て行くといけないから」(新改訳)
- (3) 「この国を取るかもしれない」(新共同訳)

4. 迫害の4段階

(1) 苦役をそれまで以上に重くする。

- ①奴隷を管理するための係長が任命された。
- ②倉庫の町ピトムとラメセスを建設するために使役した。
 - *ピトムとは、「ツム(エジプトの偶像神)の家」という意味。
 - *ラメセスとは、「太陽神の息子」という意味。

*単に倉庫の町ではなく、偶像礼拝の中心となる町を建設させた。

*考古学の発掘：後期青銅器時代(前1550～1250年)に建設された。

(2)しかし、イスラエル人たちはますます増え広がった。

①過酷な労働によって、出生率を減らそうとしたが正反対の結果が出た。

②創15:5の成就。神の守りがあった。

(3)それを見て、エジプト人はイスラエル人に対する恐れを抱いた。

(4)そこでエジプトは、さらに過酷な労働をイスラエル人に課すことにした。

①粘土やれんがの激しい労働

*石はエジプト南部でしか採れない。

*エジプトの北部では、れんがが建材として用いられた。

*貝殻やわらを混ぜた粘土を型に入れ、それを日干しにした。

②畑のあらゆる労働

③過酷な労働

5. クリスチャンへの教訓

(1)イスラエル人の力は、神から来ている。

(2)現代のリバイバルの多くは、迫害のある地域で起こっている。

(3)「…あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです」(ヨハ16:33)

III. 民族抹殺におびえるイスラエルの民(1:15～22)

1. 民族抹殺の命令

(1)エジプトの王は、ヘブル人の助産婦に命じる。

①「ヘブル人」とは、イスラエル人が異邦人に自己紹介する時に使う言葉。

②エジプト人やペリシテ人は、軽蔑の意味を込めてこの言葉を使う。

(2)「産み台の上を見て」(新改訳)

①「2つの石を見て」

②「子供の性別を確かめ」(新共同訳)

(3)もし男の子なら殺し、女の子なら生かしておけ。

(4)古代の法律では、子どもの人種は、父親によって決まる。

①イスラエル人の女がエジプト人の子を産むなら、その子はエジプト人。

②あるいは、別の人種の奴隷と結婚するなら、奴隷の数は減らない。

2. シフラとプア

(1) 助産婦の代表

(2) 助産婦たちは、エジプトの王よりも神を恐れた。

①箴1：7、9：10

(3) 王の命令に背き、男の子を生かしておいた。

①王は権力者で、思いのままに人を動かすことができた。

②助産婦たちは奴隷で、無力であった。しかし、王に従わなかった。

3. 王の尋問と助産婦たちの答え

(1) なぜ男の子を生かしておいたのか。

(2) 「ヘブル人の女はエジプト人の女と違って活力があるので、助産婦が行く前に産んでしまうのです」

①本当の理由を隠している。

②神は、人がご自身に対して従順であるかどうかを最も問題にされる。

(3) 神は、彼女たちの信仰を大いに祝福された。

①イスラエルの民は増え、非常に強くなった。

②彼女たちにも子どもが生まれ、その家は栄えた。

4. 反ユダヤ主義政策

(1) 助産婦を使うという方法が失敗したので、民を動員するという方策を実行した。

(2) 「生まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかななければならない」

①反ユダヤ主義政策が、公の政策として採用された。

②エジプトは、反ユダヤ主義政策を公に採用した最初の国となった。

(3) 最悪の局面に入った。エジプトを脱出せねばならない日が刻々と近づいていた。

結論：このメッセージは、現代の出エジプトについて考えるためのものである。

1. 反ユダヤ主義の源流

(1) 恐れが原因である。

(2) 神の計画を妨害する力が背後で働いている。

(3) すべての反ユダヤ主義は、神の計画を否定し、神ご自身を否定する。

2. 解放の必要性

(1) 1章は解放の必要性について語り、2章は解放者の準備について語っている。

- (2) イスラエル人の状況は、解放の必要性を雄弁に語っている。
- (3) 私たちもまた、靈的には罪からの解放を必要としている。
 - ①認罪は救いの前提条件である。
 - ②パウロはロマ1～2章で、野蛮人もギリシア人もユダヤ人も同罪だとする。
- (4) 私たちのモーセはすでに現れた。
 - ①ロマ3：23～24

3. 解放の先にあるもの

- (1) 出エジプト記というタイトルについての疑問
 - ①洗礼を受けて満足しているなら、信仰は後退するしかない。
- (2) 出エジプト記の構造
 - ①1～18章は、出エジプト体験（洗礼を受けるところまで）
 - ②19～24章は、シナイ契約とモーセの律法（神がどういうお方であるかを知る）
 - ③25～40章は、幕屋と神の臨在（神との交わり）
- (3) 私たちの課題
 - ①求道者は、出エジプト体験をすること。
 - ②洗礼を受けた者は、神を知り、神との交わりを楽しむこと。

【出エジ2】出エジプト記2章1節～25節

「解放者の準備」

イントロ：

1. 文脈の確認

- (1) 神はアブラハム、イサク、ヤコブに約束された。
 - ①イスラエルの民は、カナンの地で自由な民として生きようになる。
 - ②イスラエルの民は、全世界の人々を祝福するようになる。
- (2) イスラエルの民は、エジプトで約400年間奴隷となっている。
 - ①過酷な労働
 - ②助産婦を使った男児の抹殺
 - ③全国民を動員した反ユダヤ主義政策
- (3) 神はご自身のマニフェストを実行されるのか。

2. モーセの登場

- (1) 解放者の準備
- (2) キリストの型
 - ①預言者
 - ②解放者
 - ③律法の付与者
 - ④仲介者

3. メッセージのアウトライン

- (1) 神の計画が動き始める。(2：1～10)
- (2) 人間の計画が割り込んでくる。(2：11～22)
- (3) そして、オリーブの木は残った(2：23～25)
 - ①江戸時代前期に仙台藩(60万石)で起きた「伊達騒動」
 - ②山本周五郎の小説『縦ノ木は残った』
 - ③パウロは、ロマ11章でオリーブの木を比喩的に使っている。

4. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 物語の底流にあるもの
- (2) 神の時
- (3) 神の方法

このメッセージは、私たち自身の物語を学ぶためのものである。

I. 神の計画が動き始める(2:1~10)

1. モーセの両親

- (1) レビ族のアムラムとヨケベデ(出6:20)
- (2) 甥と叔母の結婚である。
- (3) モーセの律法では近親婚は禁止される。

2. モーセの誕生

- (1) すでにアロンとミリアムは生まれていた。
- (2) 「女はみごもって、男の子を産んだが、そのかわいいのを見て、三か月の間その子を隠しておいた」
 - ① 「かわいい」はヘブル語で「トブ」。
*使7:20「このようなときに、モーセが生まれたのです。彼は神の目になつた、かわいらしい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、」
 - ② 両親は霊的な目で我が子を眺め、それが特別な子であることを感じた。
*ヘブ11:23「信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって三か月の間隠されていました。彼らはその子の美しいのを見たからです。彼らは王の命令をも恐れませんでした」

3. モーセをナイル川に浮かべる

- (1) 隠しきれなくなった。
- (2) パピルス製のかご
 - ① エジプトの言葉「テイバー」
 - ② ノアの箱舟を指す言葉
 - ③ 防水加工を施した(瀝青と樹脂)。
- (4) 「ナイルの岸の葦の茂みの中に置いた」
 - ① 恐らくパロの娘が水浴びに来る辺りであろう。
- (5) 姉のミリアムは遠くから見守っていた。

4. パロの娘の登場

- (1) ナイル川は女神と考えられていた(インドのガンジス川と同じ)
 - ① 命を与える川
 - ② 癒しを与える川
- (2) 「パロの娘が水浴びをしようとナイルに降りて来た」

①朝の祈りを終えようとしていた。

(3)「彼女は葦の茂みにかごがあるのを見、はしためをやって、それを取って来させた」

①ナイルに抱かれた赤子を見つけたのは、ただ事ではないと理解したのである。

②泣いている赤子を不憫に思った。

③「これはきっとヘブル人の子どもです」

*ヘブル人とエジプト人とは、割礼の方法が異なった。

5. ミリアムの機転

(1)ヘブル人の乳母を紹介した。

(2)「そうしておくれ」

(3)母ヨケベデは、パロの娘から賃金をもらってモーセを育てた。

(4)パロの娘は欺かれたのではない。知っていてそうしたのである。

①この2人の女性の間には、暗黙の了解がある。

②神の摂理が働いている。

6. モーセの命名

(1)5歳前後でパロの娘のもとに連れて行かれ、王女の養子となる。

(2)モーセと命名される。

①エジプト第18王朝のパロの名前アフモス、トゥトモスなどモスが付く。

②「モス」とは「子を産む」という意味である。ナイルが産んだ子。

③エジプトのパロの名は、偶像の名前にモスが付いている。

④モーセも「○○モス」と呼ばれたはずである。

(3)ユダヤ人による解釈

①ヘブル語では、「モシエ」。

②「マシャ」は引き上げる。

7. 宮殿で育つモーセ

(1)パロの娘とは、トゥトモス1世の娘ハトシェプストである。

①後に、義理の息子トゥトモス3世とともにエジプトを共同統治することになる。

②男装して統治した(正式な王ではないので統治は存在しない)。

③彼女のミイラは、2007年6月ザヒ・ハワス博士らのチームによって特定された。

(2)モーセが受けた教育

①パロは出来る限り多くの子を産み、教育を施し、軍事、管理に当たらせた。

②モーセもまた同様の教育を受けたことは間違いないだろう。

(3)反ユダヤ主義政策が、解放者を育てるという結果につながった。

II. 人間の計画が割り込んでくる。(2:11～22)

1. モーセの自己認識

- (1) ヘブル人であるという自覚を失っていなかった。
 - ①当時40歳(使7:23)
 - ②幼児教育の重要性
- (2) ヘブル人たちが不当に苦しめられていることを知っていた。
- (3) モーセは、責任を追い込むタイプの人間である。

2. 解放者としての振る舞い

- (1) ひとりのヘブル人を助けるために、あるエジプト人を打ち殺した。
- (2) ヘブル人同志の争いの仲裁者となる。
- (3) しかし、ヘブル人たちはモーセを解放者として認めなかった。
 - ①将来、ヘブル人たちがモーセに示すようになる態度を予感させる。
- (4) さらに、彼がエジプト人を殺したことをパロに密告した。
- (5) パロはモーセを殺そうとするが、モーセはミデヤンの地に逃れた。
 - ①アカバ湾の東側、アラビア半島の西端にある地
 - ②逃亡者には好都合な地

3. 7人の娘を助けるモーセ

- (1) モーセの性質は変わらない。
- (2) 父は、そのような優秀な男性を見逃さない。
 - ①砂漠での「もてなし」の精神 創18:1～8
 - ②今日でもこの地域の人々は同じ「もてなし」を実行している。
- (3) 祭司の名は、レウエル(神の友という意味)。
 - ①出3:1には、イテロという名が出てくる。
 - ②イテロはタイトルであり、レウエルは固有名詞である。
- (4) 彼は、偶像礼拝に陥っていない祭司であろう。

出18:12「モーセのしゅうとイテロは、全焼のいけにえと神へのいけにえを持って来たので、アロンは、モーセのしゅうととともに神の前で食事をするために、イスラエルのすべての長老たちといっしょにやって来た」

4. ミデヤンでの40年

- (1) チッポラと結婚
- (2) 息子にゲルシヨムという名を付ける。
 - ①「私は外国にいる寄留者だ」(何の権利もない)

- ②ヘブル人の解放者となる夢を放棄していた。
- (3) 羊飼いととしての経験を積む。
 - ①荒野でイスラエルの民を導くための神からの訓練
 - ②エジプトでの教育は知的なもの、ミデヤンでの教育は実践的なもの。

III. そして、オリーブの木は残った(2:23~25)

1. 「エジプトの王は死んだ」

- (1) ハトシェプストはすでに死んでいる。
- (2) 義理の息子トゥトモス3世が統治していた。
- (3) その彼がモーセの命を狙っていたが、彼は死んだ。
- (4) 新しいパロは、アメンホテプ2世である。
 - ①反ユダヤ主義政策を続行した。
 - ②彼が出エジプトの時のパロである。

2. 神が行動を起こす。

- (1) 「聞かれた」
- (2) 「思い起こされた」
- (3) 「ご覧になった」
- (4) 「みこころを留められた」

3. 神が行動を起こす2つの理由

- (1) イスラエルの民の悲惨な姿をご覧になった。
 - ①神は憐れみ深い方
 - ②マタ9:35~38
- (2) アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。
 - ①これはアブラハム契約と呼ばれるものである。
 - ②これが、パウロがロマ11章で言うオリーブの木である。
 - ③忘れていたわけではなく、行動を起こす時が来たという意味である。

結論: このメッセージは、私たち自身の物語を学ぶためのものである。

1. 物語の底流にあるもの

- (1) 創12章以来私たちが追いかけて来たアブラハム契約である。
- (2) ロマ11章で論じられていることは、アブラハム契約のことである。

- ①オリーブの木の幹は、アブラハム契約
 - ②折られた栽培種の枝は、イスラエルの民
 - ③接木された野生種の枝は、異邦人クリスチャン
 - ④やがて折られた枝は元の幹に接木されるようになる。
- (3) 神の計画は必ず成就するという前提で、自分の物語を作り上げることが重要。

2. 神の時

- (1) モーセの勇気と信仰と行動力には敬意を表す。
- ①ヘブ 11:24 ~ 26
- (2) しかし彼は、神の時を読み間違えていた。
- ①挫折の経験
 - ②40年の荒野での訓練
- (3) 自分が人生のどの段階にいるかを見極める目が大切。
- (4) 今の時代性に目を留める。
- ①1989年11月9日のベルリンの壁崩壊
 - ②20世紀は、1914年の第1次世界大戦で始まり、ベルリンの壁崩壊で終わった。
 - ③それ以降は、21世紀型世界が出現した。
 - ④多極化と民族紛争、地域紛争の時代
 - ⑤国境を越えた人、物、金の移動。「渡り鳥の時代」
 - ⑥アジアの時代
 - ⑦「自立と共生」がキーワードである。
 - ⑧「ネットワークキング」「ブリッジビルダー」

3. 神の方法

- (1) エジプト人をひとりずつ殺していても、ヘブル人の解放にはつながらない。
- (2) 神の方法によらなければ、真の解放は来ない。
- (3) 神のことばを理解し、それを語るこそ、今も昔も神の方法である。
- ①物語の底流を語れ。
 - ②イスラエルの民を物語の中心に据えて語れ(彼らは神の方法である)。
 - ③真の出エジプトはイエス・キリストにおいて成就したことを語れ。

【出エジ3】出エジプト記3章1節～10節

「モーセの召し」

イントロ：

1. 文脈の確認

(1) イスラエルの民は、エジプトで約400年間奴隷となっている。

- ①過酷な労働
- ②助産婦を使った男児の抹殺
- ③全国民を動員した反ユダヤ主義政策

(2) 解放者モーセの登場

- ①最初の40年はエジプトの王宮で王女の息子として過ごした。
- ②次の40年はミデヤンの荒野で羊飼いとして過ごした。
- ③そして、80歳になった時に神からの召命を受けた。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 栄光の神
- (2) 個人と係わる神
- (3) 聖なる神
- (4) 契約を結ぶ神

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 神の再発見
- (2) 召命の認識

このメッセージは、神を再発見し、召命を認識するためのものである。

I. 栄光の神(3:1～3)

1. 羊飼いのモーセ

(1) しゅうとイテロの羊

- ①レウエル(神の友という意味)という名で出ていた(2:18)。
- ②イテロはタイトルであり、レウエルは固有名詞である。

(2) 神の山ホレブ

- ①ホレブは山脈である。

- ②シナイ山はその山脈の中の1つの山である。
- ③そこには豊かな緑があったのであろう。
- ④「神の山」というのは、モーセが後から振り返って書いている言葉である。
 - * 燃える柴を見た場所
 - * モーセ契約(シナイ契約)が締結された場所

2. 燃える柴

(1) 「【主】の使い」

- ①第二位格の神(受肉前のメシア)
- ②同じ方が「【主】(ヤハウエ)」と呼ばれている(4節)。
- ③さらに、「神(エロヒム)」と呼ばれている(4節)。

(2) 柴の中の火の炎

- ①背の低い木(柴)は、羊ややぎの餌になった。
- ②乾燥した砂漠地帯では、柴が燃えることは珍しくはない。
- ③この場合は、柴が燃え尽きないので珍しかった。
- ④エジプトで奴隷になっているイスラエルの民を象徴している。

(3) シャカイナグローリーの現れ

- ①神の栄光が、雲、煙、光、火、などの目に見える現象となって現れたもの
- ②神の臨在がそこにある。

3. モーセの反応

- (1) 好奇心は衰えていない。
- (2) 「大いなる光景」
 - ①「大きな見もの」(口語訳)
 - ②「不思議な光景」(新共同訳)
 - ③ヘブル語「ガドル」
 - * 神ご自身を指すこともある。

4. シャカイナグローリーと異邦人クリスチャン

- (1) シャカイナグローリーは「盲点」である。
- (2) 神の臨在を歓迎しよう。

II. 個人と係わる神(3:4)

1. ご覧になる神(第二位格の神)

- (1) モーセの人生を見ておられた。
- (2) モーセの性格を知っておられた。

2. 名前を呼ぶ神

- (1) シャカイナグローリーの中から
- (2) 「モーセ、モーセ」。重要な使命に召される場合によく起こる。
 - ① アブラハム (創 22 : 1)
 - ② ヤコブ (創 46 : 2)
 - ③ サムエル (Iサム 3 : 10)
 - ④ パウロ (使 9 : 4)

3. モーセは「はい、ここにおります」と答えた。

4. 新約聖書の例

- (1) ヨハ 10 : 3
- (2) ルカ 19 : 5

III. 聖なる神 (3 : 5)

1. あなたの足の靴 (サンダル) を脱げ。

- (1) モーセが歩いて来た地は汚れた地である。
- (2) シャカイナグローリーが輝く地は聖なる地である。

2. 「聖なる地」 (アドゥマツト・コデッシュ)

- (1) 「コデッシュ」の本来の意味は、区別されているという概念である。
- (2) セム系の言語には同じルート (語幹) の言葉が出て来る。
 - ① 偶像の神と人間とを区別するための言葉である。
 - ② 偶像の神は人間と同じように善も悪も行うが、その規模が大きい。
- (3) 聖書の神に関連してこの言葉が用いられる場合
 - ① 創造主と被造物を区分する言葉
 - ② 道徳的完全性を示す言葉
- (4) 「コデッシュ」の使用頻度
 - ① 旧約聖書全体で 470 回
 - ② 創世記は 0 回
 - ③ 出エジプト記は 70 回

④レビ記は92回

⑤民数記57回

3. 信者への命令

(1) レビ11:45

「わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した【主】であるから。あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから」

(2) Iペテ1:13～16

IV. 契約を結ぶ神(3:6～10)

1. 「アブラハム、イサク、ヤコブの神」

(1) 契約の神の御名である。

(2) 神はモーセの先祖たちと交わした契約に忠実なお方である。

(3) 死後の命を保証する御名である。

①サドカイ人との論争におけるイエスの言葉(マタ22:32)

2. 契約の神は行動する神である。

(1) 3つの動詞

①見た。

②聞いた。

③知っている。

(2) エジプトの手から救い出す。

(3) カナンの地に上らせる。

①広い良い地

②乳と蜜の流れる地

③「カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所」

④カナンの地は世界のハイウェイである。

⑤そこをイスラエルの民が所有するのは、人間的には不可能な業である。

⑥400年前の約束の成就である。

3. 契約の神は人間を用いる神である。

(1) モーセに対する派遣のことば

(2) 40歳のモーセと80歳のモーセは違う。

- ①自分が無力であることを知った。
- ②それゆえ、神はモーセを用いることができた。

結論：このメッセージは、神を再発見し、召命を認識するためのものである。

1. 神の再発見

- (1) 4つの視点から神について学んだ。
 - ①栄光の神
 - ②個人と係わる神
 - ③聖なる神
 - ④契約の神
- (2) 自分探しの旅は、神という「鏡」に自分を映すまでは完結しない。
 - ①モーセは自分がどういう人間であるかを発見して行く。
 - (例話) 鶏鳴教会の石段でころんだ婦人への夫の言葉

2. 召命の認識

- (1) 転職の勧めではない。
- (2) 人生の方向転換の勧めである。
 - ①神とともに大いなる夢を描こうではないかという誘いである。
- (3) 神は人を用いる。
 - (例話) 聖地旅行で自分がメッセージを語らない時
 - (例話) 時代は終末に近づいている。
ハナさんとの会話 (日本は反イスラエルになっているか)
- (4) リバイバルに備えよう。

【出エジ4】出エジプト記3章11節～22節

「モーセの言い訳(1)」

イントロ：

1. 文脈の確認

- (1) 神は、燃える柴の中からモーセに語りかけた。
- (2) 神の計画は、イスラエルの民をエジプトから解放し、約束の地に導くこと。
 - ①「下って来た」(8節)は、重要な動詞である。
 - ②神が歴史に介入した。
 - ③ヨハ1：14と関連がある。
- (3) 出エジプトと新約聖書の救いの関係(ロマ6章)
 - ①束縛(エジプト)から自由(カナン)の地へ
 - ②キリストとともに十字架に付けられ、キリストとともに復活する。
- (4) モーセは、神の計画を実行するために派遣された。
 - ①ここにも、新約聖書との関連性がある。
 - ②私たちに、大宣教命令が与えられている。
- (5) しかし、モーセは言い訳を並べて神の任命を断ろうとする。
 - ①4つの言い訳がある。
 - ②それらの言い訳は、神の資質に関する疑問でもある。
 - ③今回は、最初の2つの言い訳を見てみよう。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 自分には資格がない。
- (2) 自分には知識が足りない。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 自らのミニストリーを回復する。
- (2) 出来ない理由ではなく、出来る理由を考える。
- (3) 具体的な一歩を踏み出す。

このメッセージは、自らのミニストリーを回復し、具体的な一歩を踏み出すためのものである。

I. 自分には資格がない(3:11~12)

1. モーセの言葉

「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならぬとは」

- (1) 昔はいざ知らず、今は無名の羊飼いである。
- (2) パロは最高の権威を持ち、強力な軍隊を率いている。
- (3) 杖一つしか持っていない私に、何が出来るというのか。
- (4) かつては自分の名はパロに知られていたが、それから40年も経っている。
- (5) イスラエル人は40年前に自分を拒否したことがある。
- (6) 彼らは数が多く、奴隷で、しかも武器を持っていない。
- (7) その上、頑固である。

2. 神の回答

「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない」

(1) 「わたしはあなたとともにいる」

- ①神がともにいるなら、私にその資格があるかどうかは問題ではなくなる。
- ②モーセの疑問は、実際は神の力に関する疑問であることが分かる。

(2) 「これがあなたのためのしるしである」

- ①「神がともにいる」ということが「しるし」なのではない。
- ②その後続く内容が「しるし」である。

「このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える」(新共同訳)

(3) 「しるし(オツツ)」とは何か。

- ①通常は、信仰によって行動するかどうかを決めた後に与えられるものである。
- ②信仰のないところに、「しるし」によって信仰を作り出すことはできない。
- ③すでに信仰を持っている人には、励ましとなる。

(4) ここでの「しるし」とは、「歴史的しるし」である。

- ①実現してから分かる。
- ②後から振り返って、神が介入されたことが分かる。
- ③シナイ山はエジプトからカナンへの途上にはない。
- ④しかし、イスラエルの民はシナイ山で神を礼拝するようになる。

(5) イザ7：14

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける」

- ①これもまた、「歴史的しるし」である。
- ②アハズ王には何の助けにもならない。
- ③イエスの処女降誕によって、神の真実さが証明された。

3. 私たちへの教訓

- (1) 目の前で起こる癒しや不思議だけが「しるし」ではない。
- (2) 神の存在を証明する最大の「しるし」は歴史である。
- (3) 特に、イスラエルの歴史の中に神の証明がある。
- (4) 旧約聖書と新約聖書のつながりは、ここにその保証がある。
- (5) まだ起こっていないことも、必ず起こると確信できるのである。

II. 自分には知識が足りない(神の御名を知らない)(3：13～22)

1. モーセの言葉

- (1) 資格がないという問題は解決した(25%解決)が、次の疑問がわいてきた。
- (2) パロよりもイスラエルの民の方が問題である。

「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました』と言えば、彼らは、『その名は何ですか』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか」

(例話) 伝道のための方策を与えられた牧師。問題は外ではなく内にある。

(3) 想定される3つの質問

- ①モーセはどのような権威によって派遣されたのか。
 - * 出2：14「誰がお前を我々の監督や裁判官にしたのか」
 - * モーセはその問いにすぐに答えられなかった。
 - * 私たちも、「誰が私を遣わしたのか」と自問自答するのがいい。
- ②神は、今度はどういう御名で働かれるのか。
 - * イスラエルの民は、神に叫んでいたのだから、神のことは知っていた。
 - * 働きの段階に応じて、新しい御名を啓示されるという認識があった。
- ③神の力を引き出すマジックワード(まじないの言葉)を知っているか。
 - * 古代中近東の一般的な認識
 - * マジックワードが問題なのではなく、神の本質こそ問題である。

2. 神の回答

(1) 御名の啓示

「わたしは、『わたしはある』という者である」

① 訳の種類

- * I AM WHO I AM.
- * 「わたしは、有って有る者」(口語訳)
- * 「わたしはある。わたしはあるという者だ」(新共同訳)
- * 「我は有りて在る者なり」(文語訳)

② 神の本質の啓示

- * 自立自存の神
- * 自足している神
- * すべてを包含している神
- * いかなる限界もない神

(2) 派遣のことば

「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた』と」

(3) イスラエルの民に告げることば

「あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である」

① 「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」

- * 契約の神の御名

② 「【主】」(ヤハウェ)

- * 創世記に165回出て来る。
- * 漸進的啓示という概念が重要である。
- * 私たちは、神が啓示することをよしとされた範囲でしか知り得ない。
- * なぜこの御名が新しい啓示なのか。
- * 今まで神の民が知らなかった大いなる業を行う神という認識が生まれる。
- * ユダヤ人たちは、「アドナイ」と発音する。

(4) エジプトで起こることの予告

① イスラエルの民は、モーセの声に聞き従うだろう。

② 長老たちといっしょにパロのところに行け。

③ パロに告げよ。

- * ヘブル人の神、【主】からのことば
- * 「荒野へ3日の道のりの旅をさせ、【主】にいけにえを捧げさせて欲しい」

* これは最低限のリクエストである。

* エジプトからシナイ山へは直線で3日の道のりである。

④パロは心を頑なにするだろう。

* パロの責任はないのか。

* 神の主権と人間の責任の相関関係がある。

* パロはエジプトでは神として振る舞っていた。

* 神とパロの葛藤は、光と闇の葛藤でもある。

⑤神がすべての清算を行うであろう。

* あらゆる不思議でエジプトを打つ。

* 未払い賃金の支払いが行われる。

* 創 15：14 の成就

* この財産は、幕屋建設のために必要となる。

(5) ここまでで問題は50%解決したが、まだ2つの心配が残っている。

結論：このメッセージは、自らのミニストリーを回復し、具体的な一歩を踏み出すためのものである。

1. 自らのミニストリーを回復する。

(1) モーセは、隠遁生活から表舞台に引き出された。

(2) 今こそ、お客さんの信仰から、自らが主役となる信仰に飛躍する時である。

(3) リバイバルが起こることを前提に考える。

①自給伝道の時代

②教会堂中心から、家の教会への移行の時代

③伝統や古い枠組みだけが、聖書的というわけではない。

2. 出来ない理由ではなく、出来る理由を考える。

(1) モーセの言い訳は、私たちにも理解できる。

①自分には資格がない。

②自分には知識が不足している。

(2) 神がどういうお方であるかが問題である。

①私たちとともにいてくださる神

②歴史的しるしを与えてくださる神

(3) イエスの弟子たちも、同じ約束をもって派遣された。

①マタ 28：20

3. 具体的な一歩を踏み出す。

- (1) アンケートに「より具体的に何をなすべきか知りたい」というコメントがある。
- (2) 具体的に考えるのは、各人の責任である。
- (3) 神の権威と、人間の努力の一体化によって、神の業は進む。

(例話) マタ4：13

「そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である」

- ①神がともにおられる。
- ②「歴史的しるし」がともなっている。
- ③今後、イエスの弟子たちを集め、訓練することが私の使命である。

【出エジ5】出エジプト記4章1節～17節

「モーセの言い訳(2)」

イントロ：

1. 文脈の確認

- (1) 神の計画は、イスラエルの民をエジプトから解放し、約束の地に導くこと。
- (2) 神は人類の歴史に介入しようとした。
- (3) 出エジプトと新約聖書の救いには相関関係がある(ロマ6章)。
- (4) 神はモーセを通して働こうとしておられる。
- (5) しかし、モーセは言い訳を並べて神の任命を断ろうとする。
 - ① 4つの言い訳がある。
 - ② それらの言い訳は、神の資質に関する疑問でもある。
 - ③ 前回は、最初の2つの言い訳を見た。
 - * 自分には資格がない。
 - * 自分には知識が足りない。
 - ④ 神の答えによって、問題の50%は解決した。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 自分には力がない。
- (2) 自分は口下手だ。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 自らのミニストリーを回復する。
- (2) 出来ない理由ではなく、出来る理由を考える。
- (3) 具体的な一歩を踏み出す。

このメッセージは、自らのミニストリーを回復し、具体的な一歩を踏み出すためのものである。

I. 自分には力がない(4:1～9)。

1. モーセの言葉(3番目の言い訳)

「ですが、彼らは私を信ぜず、また私の声に耳を傾けないでしょう。『【主】はあなたに現れなかった』と言うでしょうから」

- (1) モーセは40年前の失敗の記憶に縛られている。
- (2) 神のことは否定するほど強い束縛である。
 - ①出3:18「彼らはあなたの声に聞き従おう」
 - ②あるいは、「長老たちは信じて、民衆は信じない」という意味かもしれない。
- (3) 自分は「しるし(燃える柴)」を見ているが、彼らは見ていない。
- (4) 客観的な根拠や証拠がないのは、カルトや新興宗教の特徴である。
 - ①聖書信仰の確かさは、無数の歴史的証拠によって証明される。
 - ②聖書信仰は、「理性的理解」と「単純な信頼」のバランスの上に成り立つ。

2. 神の回答

- (1) 神はモーセに客観的な証拠となる3つのしるしを与える。
 - ①モーセの信仰を強め、
 - ②モーセが神から遣わされたことをイスラエル人たちに示し、
 - ③モーセの神がエジプトの神々よりも強力であることをパロに示すため。
- (2) 3つのしるしは、文化的なしるしである。

3. 3つのしるし

- (1) 蛇のしるし
 - ①「あなたの手にあるそれは何か」。自分が持っているものに注目させる。
 - ②「杖です」。羊飼いが持っている杖。
 - ③「それを地に投げよ」
 - ④杖は蛇になった。蛇とはコブラのこと。
 - ⑤モーセはそれから身を引いた。「モーセは飛びのいた」(新共同訳)
 - * 幻や見せかけではなく、本物のコブラである。
 - * イエスは水を本物のブドウ酒に変えた。
 - ⑥「手を伸ばして、その尾をつかめ」
 - ⑦それは、モーセの手の中で杖になった。
 - ⑧コブラはパロの権威と神性を象徴するもの(王冠に刻み込まれていた)。
 - ⑨モーセは杖をコブラに変え、さらに尾を握ってもとの杖に変えた。
 - ⑩これは、モーセの神がパロよりも偉大であることを示している。
 - ⑪蛇はサタンの象徴でもある。この奇跡は、サタンの力ではなく神の力による。
 - ⑫私たちは蛇の尾を掴むだけでよい。頭を砕くのはメシアの役割である。
- (2) 皮膚病のしるし
 - ①「手をふところに入れよ」
 - ②手をふところに入れ、出すと、皮膚病に冒されて雪のようになった。

「彼の手はツアラアトに冒され、雪のようになっていた」(新改訳)

「手は重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた」(新共同訳)

* 「らい病」というかつての訳は正確ではない。

③ 「あなたの手をもう一度ふところに入れよ」

④ モーセの手は元通りになっていた。

⑤ 古代世界では、多くの人たちが皮膚病で苦しんでいた。

⑥ 最初のしるしを信じなくても、このしるしは信じるだろう。

(3) ナイルの水のしるし

① 以上の2つのしるしを信じないなら、第3のしるしがある。

② ナイルから水を汲み、それをかわいた土に注ぐ。

③ その水は血となる。

* ナイルは命の守り神である。

* その水を血に変える神の方が偉大である。

* 豊穡なエジプトの地を不毛の地(死の地)に変えることができる。

* ナイルにヘブル人の赤子を投げ捨てたエジプトへの報復である。

II. 自分は口下手だ(4:10~17)。

1. モーセの言葉(4番目の言い訳)

「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです」

(1) 最後の苦し紛れの言い訳である。ほとんど笑えてくる。

(2) 弁が立つ人が派遣された方がいい。

2. 神の回答(1)

「だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、【主】ではないか」

(1) 神は忍耐力を失くしつつある。

(2) 人間の器官を造ったお方は、それをを用いることもできる。

(3) 問題は、「やる気」があるかどうかである。

(4) 「さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう」

(5) 「ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください」

① 言い訳がなくなったので、懇願しているだけ。

3. 神の回答 (2)

- (1) 主は怒られた。
- (2) 「あなたの兄、レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼がよく話すことを知っている」
- ①わたしがあなたに語る。
 - ②あなたは彼に語る。
 - ③彼は民に語る。
 - ④「啓示」という概念がよく表現されている。
 - * 神がモーセの口を通して語る (A)。
 - * アロンがそれを聞いて民に伝える (B)
 - * イスラエルの民がそれを聞く (C)
 - * その内容が文字として書き記され、出エジプト記として残る (D)。
- (3) 「今、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から喜ぼう」
- ①神からの啓示があったのであろう。
 - ②新しい幻は、人を活気づける。
 - ③モーセよりも信仰的、熱心、従順である。
- (4) 「あなたはこの杖を手に取り、これですしを行わなければならない」
- ①しるし(複数形)とは、10の災害のことである。

結論：このメッセージは、自らのミニストリーを回復し、具体的な一歩を踏み出すためのものである。

1. 自らのミニストリーを回復する。
 - (1) モーセは、隠遁生活から表舞台に引き出された。
 - (2) 今こそ、お客さんの信仰から、自らが主役となる信仰に飛躍する時である。
(例話)「与えることの重要性」
 - (3) リバイバルが起こることを前提に考える。
 - ①自給伝道の時代
 - ②教会堂中心から、家の教会への移行の時代
 - ③伝統や古い枠組みだけが、聖書的というわけではない。
2. 出来ない理由ではなく、出来る理由を考える。
 - (1) モーセの言い訳は、私たちにも理解できる。
 - ①自分には資格がない。
 - ②自分には知識が不足している。

③自分には力がない。

④自分は口下手だ。

(2) 神がどういうお方であるかが問題である。

(3) 自分の能力を過小評価している。

①最初はアロンが語っているが、次第にその回数は少なくなっていく。

②モーセは自分の弱点を誇張していたのか。

③経験が増すに従って、弱点が克服されて行ったのか。

3. 具体的な一歩を踏み出す。

(1) 自分自身を準備する。

(2) モーセとアロンの関係を築く。

(3) 私に「弟子訓練」のお手伝いをさせてください。

(例話) 与えること

「お世話になっております。毎週、ハーベストフォーラム東京の集會に集わせて頂いておりますYOです。先週の出エジプト記もそうですが、創世記から続き、非常に私の信仰生活にとって、多くの励ましと助けをメッセージより頂いております。感謝です。

会社を休んでいた間、色々なことを考えました。転職せよ、ということなのか、とも思いました。祈りつつ、またハーベストフォーラムにも集わせて頂く中で、神様から一つ、語られたことがあります。それは、「与えなさい」ということでした。キリストも自分が父なる神様から頂いたものを、人々に与えられました。最終的には、恥をもちもせず、ご自身をお与えくださいました。今までの人生は何かを「得る」人生でした。私の人生のベクトルは常に、自分の為になんか「得る」方向に向かっていました。自分の為には、成績を取り、大学に入り、資格を取り、会社に入り…。でも、人間の目には、良いものをたくさん得たように見えても、神様の目からすると、余計なものを背負い込んだのかもしれない(別に、努力を否定するものではなく、また勉強することが必要ない、という意味ではないです)。

今後は、何かを『与える』人生を神様と送っていきたいです。人に何かを『与える』方向に転換したいです。もちろん、具体的にそれは何なのか分かりません。私自身、煉られる必要がありますし、整えられることも必要です。まだまだ時間がかかると思います。でも、少しずつ色々なことが整理できる方向に向かっていると感じます。

先生とスタッフの皆様と神様に感謝を表したく、メールいたしました」

【出エジ6】出エジプト記4章18節～28節

「エジプトに向かうモーセ」

1. 文脈の確認

- (1) 神の計画は、イスラエルの民をエジプトから解放し、約束の地に導くこと。
- (2) 神はモーセを通して働こうとしておられる。
- (3) 4つの言い訳を並べて神の任命を断ろうとしたモーセも、ついに説得された。
- (4) モーセは、ついにエジプトに向けて出発することになった。
 - ①モーセには杖が与えられていた。
 - ②モーセにはアロンが与えられていた。

2. メッセージのアウトライン

- (1) モーセの決意
- (2) 神からの準備
- (3) 神からの警告
- (4) 神からの確認

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 奉仕にともなう犠牲を計算する。
- (2) 謙遜を身に付ける。
- (3) 幻が実現して行く過程を楽しむ。

このメッセージは、幻が実現するために必要なものを確認するためのものである。

I. モーセの決意(4:18～20)

1. しゅうとイテロの許可を得る。

「どうか私をエジプトにいる親類のもとに帰らせ、彼らがまだ生きながらえているかどうか見させてください」

- (1) ヤコブの場合は、黙って伯父ラバンのもとを去った。
 - ①財産以外に、妻たちと子どもたちを連れて出た。
- (2) モーセは、しゅうとイテロと良い関係にあった。
 - ①無断で妻のチッポラと2人の息子たちを連れ出すことはしない。
- (3) モーセは、エジプトのイスラエル人たちと連絡を取っていなかったようだ。

(4) モーセは、【主】の計画の全貌を語っていない。

- ①燃える柴については何も語っていない。
- ②自分の使命についても語っていない。
- ③アブラハムも、父の家を出て約束の地に向かう決心をした。
- ④幻に捉えられた者と、そうでない者との間には、高い壁がある。

2. イテロの答え

- (1) イテロはモーセに「安心して行きなさい」と答えた。
- (2) 「無事で行きなさい」(新共同訳)
- (3) 旅の安全とモーセの繁栄を願った。

3. 一歩進むと、次のステップが見えて来る。

「【主】はミデヤンでモーセに仰せられた。『エジプトに帰って行け。あなたのいのちを求めていた者は、みな死んだ』」

- (1) イテロの家を出た後、まだミデヤンを出る前に、【主】からの語りかけがあった。
- (2) 「今が時だから、すぐにエジプトに行け」という意味である。
- (3) 理由は、「あなたのいのちを求めていた者は、みな死んだ」ということである。
 - ①パロは死んだ。
 - ②パロの高官たちは死んだ。
 - ③モーセが殺したエジプト人の友人たちは死んだ。
- (4) これは、モーセの心から恐れを取り除くための励ましのことばである。

4. 出発するモーセ

- (1) 妻のチツポラを連れていた。
- (2) 息子のゲルショムとエリエゼルも連れていた。
- (3) 当面、エジプトに住むつもりだったのだろう。
- (4) 「ろばに乗せてエジプトの地に帰った」
 - ①ろばは、高貴な人の乗り物であった。
 - ②僕が引くろばに家族を乗せてエジプトに向かった。
- (5) 「モーセは手に神の杖を持っていた」
 - ①かつては単なる羊飼いの杖であった。
 - ②今や、神の杖となった。
 - ③モーセはこの杖で数々のしるしを行うことになる。
 - *エジプトの地を10の災害で打つ。
 - *紅海の水を分ける。

* 荒野に水を湧き出させる。

④ 私たちにとっては、「福音」であり「神のことば」である。

* 聖書が、単なる本から「神の本」に変わる。

II. 神からの準備 (4:21～23)

1. ここで語られている内容は、これから先の数章で起こることがらである。

(1) エジプトに帰ったら、パロの前で神から与えられた不思議を行なえという命令

(2) 神はパロの心を頑なにするので、彼は民を去らせないだろうという預言

(3) パロに警告のことばを語れという命令

「イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。…わたしの子を行かせて、わたしに仕えさせよ。もし、あなたが拒んで彼を行かせないなら、見よ、わたしはあなたの子、あなたの初子を殺す」

① 神はイスラエルの民を「わたしの初子」と呼ばれた。

② 古代世界では、初子は長子の権利を持った者として最も大切にされた。

③ 神は「初子」という言葉を用いて、ご自身と民との関係を説明された。

④ これは、アブラハム契約に基づく親子関係である。

⑤ 神の初子を苦しめる者は、自らの初子を殺されることになる。

⑥ パロの初子だけではなく、パロに属する者の初子すべてである。

⑦ 私たちクリスチャンは「神の子」と呼ばれるようになった。

* 新しい契約に基づく親子関係

* Iヨハ3:1～2

* ロマ8:14～17

2. これらの予告は、モーセを解放者として整えるためのものである。

(1) イエスの弟子たちへの予告

① マタ10:5～42 宣教の拡大

② マタ28:18～20 大宣教命令

3. 神がパロの心を頑なにしたのか。

(1) ロマ9:14～18が重要

「こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです」(18節)

(2) 人間の側の責任

① 人は、神によって心が頑なにされるから滅びるのではない。

- ②人は、生まれた時点ですでに心が頑なになっている。
- ③それは、アダムの子孫として、罪の性質を宿して生まれてくるからである。
- ④人は、すでに心が頑なだから滅びる。

(3) 神の選び

- ①悔い改めに導かれるのは、神の選びとあわれみが注がれるからである。
- ②従って、誰が救われるかは、すべて神の御心にかかっている。
- ③そんなことは受け入れられないという人のために、パウロはこう語っている。
「しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、『あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか』と言えるでしょうか」(ロマ9:20)

III. 神からの警告(4:24~26)

1. エジプトへの途上、主はモーセに現れ、彼を殺そうとされた。

- (1) モーセは致命的な病いに打たれ、危篤状態に陥った。
- (2) 妻のチッポラは、急いで自分の息子に割礼を施した。
 - ①弟のエリエゼル
 - ②包皮をモーセの両足につけた。
 - ③その結果、モーセは死を免れた。

2. 神はなぜ、出エジプトのリーダーとして立てたモーセを殺そうとしたのか。

- (1) モーセが息子に割礼を施していなかったので、神が怒った。
- (2) 割礼はアブラハム契約のしるしである(創17:9~14)。
 - ①イスラエルのすべての男子は、生まれて8日目に割礼を受ける。
 - ②モーセは、2番目の息子に割礼を施していなかった。
 - ③妻のチッポラが割礼を嫌悪したからと思われる。
*彼女が「血の花婿」という言葉を使っていることからそれが分かる。

(3) 神はアブラハム契約の条項に違反しているモーセを殺そうとされた。

- ①アブラハム契約の条項に違反したままでは、解放者の資格はない。
- ②チッポラはすぐにそれに気づいて、急いで息子に割礼を施した。
- ③そこで神は、モーセを放された。
- ④「両足」は、男性の生殖器の婉曲語であろう。

*創49:10 メシア預言

「王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。ついにはシロが来て、国々の民は彼に従う」

* 「統治者の杖はその子孫から離れることはない」の意味

3. モーセは家族を家に帰した。

- (1) 彼女が次に聖書に顔を出すのは、出 18：2 になってからである。
- (2) 割礼を嫌ったチッボラは、大いなる奇跡の目撃者にはなれなかった。

4. 私たちへの教訓

- (1) 人は、神が用意された方法でなければ救われない。
- (2) イエス・キリストは、アブラハム契約の成就としてこの地上に現われ、十字架上で自らの命を捧げることによって救いの道を開いてくださった。
- (3) イエスを信じることは、心に聖霊による割礼が施されることである。
- (4) 新約時代においては、心に割礼を受けているかどうかの問題である。

IV. 神からの確認 (4：27～28)

1. アロンとの40年ぶりの再会

- (1) 【主】からアロンへの語りかけがあった。
- (2) 「神の山」、つまりシナイ山で再会した。
- (3) 口づけした。
 - ①兄弟との再会の喜び
 - ②イスラエルの民の解放者との出会い
- (4) これは、モーセが御心の道を歩み始めたことの確認である。

2. モーセはアロンにこれまでの経緯をすべて話した。

- (1) 【主】が語られたこと
- (2) 【主】が与えたしるし
- (3) アロンの役割

3. アロンについて

- (1) モーセの代弁者として活躍した。
- (2) 祭司職の創設に貢献した。祭司はアロンの家系から出た。
- (3) アロンが初代の大祭司となった。
 - ①特に重要な務めは、贖罪の日の務めである。
 - ②年に一度、至聖所の中に入って罪の贖いをする (レビ 16 章)。
 - ③アロン自身が、先ず自らの罪の清めを行ってから至聖所に入る。

*金の子牛を作る手伝いをした(出32章)。

*ミリアムといっしょになって、モーセの権威に挑戦した(民12章)。

(4) 真の大祭司は、イエス・キリストである。

①ヘブ7～10章

結論:このメッセージは、幻が実現するために必要なものを確認するためのものである。

1. 奉仕にとまなう犠牲を計算する(神からの準備の項)。

(1) 神の命令通りに行っても、結果が出ないことがある。

(2) 預言者の召しは、ほとんどがそれである。

(3) 神が私たちに期待しておられるのは、「成功」ではなく、「忠実さ」である。

(4) 福音を伝え、結果は神に委ねる。

2. 謙遜を身に付ける(神からの警告の項)。

(1) 神は、80年間かけて育てたモーセでさえも殺そうとされた。

(2) 神に用いられるのは、恵みであり、特権である。

(3) 決して傲慢になってはならない。

(4) 英語の「Don't take it for granted that...」である。

①当然[当たり前・もちろんのこと・常識・無論のこと]と考える。

②[思い込む・見なす・独り決めする]

③てっきり(that以下)だと思ふ、(that以下)をうのみにする。

3. 幻が実現して行く過程を楽しむ(神からの確認の項)。

(1) 目的志向ではなく、そこに至る過程を楽しむ。

(2) モーセとアロンは、夢を語り合うことを楽しんだ。

(3) 明日に生きるのではなく、今に生きることを学ぶ。

【出エジ7】 出エジプト記4章29節～5章23節

「希望が絶望に変わる時」

1. 文脈の確認

- (1) 神の計画は、イスラエルの民をエジプトから解放し、約束の地に導くこと。
- (2) 神はモーセを通して働こうとしておられる。
- (3) モーセはエジプトに入り、活動を開始する。
 - ①イスラエルの民に語りかける。
 - ②パロに語りかける。
- (4) 神からの準備があった。
 - ①神は必ず約束を成就する。
 - ②しかし、パロは頑なに神の計画に敵対する。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 信じるイスラエルの民
- (2) 敵対するパロ
- (3) 揺れ動くイスラエルの指導者たち
- (4) 自身をなくすモーセ

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) クリスマン生活のケーススタディ
- (2) 神の計画の進展
- (3) 神の再発見

このメッセージは、クリスマン生活のケーススタディである。

I. 信じるイスラエルの民(4:29～31)

1. 仕事はじめ

- (1) イスラエル人の長老たちをみな集め、彼らに語る。
- (2) 最も効率がよく、安全な方法である。

2. モーセとアロンの役割分担

- (1) アロンは、モーセの代弁者として語る。

(2) モーセは、民の前でしるしを行った(アロンがモーセの命令で行ったか)。

- ①杖を蛇にし、蛇を杖に戻す。
- ②手をふところに入れて皮膚病にし、再びふところに入れて元に戻す。
- ③ナイル川の水を血に変える。

3. イスラエルの民の応答

- (1) 民は信じた。
- (2) モーセは解放者として神から派遣された。
- (3) ひざまずいて礼拝した。
 - ①創 24:26 アブラハムの僕エリエゼルの礼拝
 - ②神が恵みによって働かれたことの認識がある。
- (4) 彼らの信仰は表面的である。
 - ①出 14:10～12 パロの軍勢が迫っているのを見て、パニック状態になる。
 - ②イエスのたとえ話。マタ 13:5～6
「また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった」

4. 私たちへの教訓

- (1) 表層的な信仰は、すぐに枯れてしまう。
- (2) キリスト教界の流行に流されるな。

II. 敵対するパロ(5:1～14)

1. パロへの言葉(1節)

「イスラエルの神、【主】がこう仰せられます。『わたしの民を行かせ、荒野でわたしのために祭りをさせよ』」

- (1) イスラエルの神=奴隷の神
- (2) 【主】(ヤハウエ) =無名の神
- (3) 「祭りをさせよ」
 - ①神がイスラエルの民を救出する理由は、礼拝する民を作るためである。
 - ②そして礼拝は、祭り(祝い)である。
 - ③この動詞は、「巡礼祭を祝う」という意味にもなる。
 - ④英語では、feast(祝いの食事)、あるいは、festival(祝祭)と訳される。
- (3) これはパロに対する最低限の要求である。

2. パロの反応(2節)

「【主】とはいったい何者か。私がおその声を聞いてイスラエルを行かせなければならないというの。私は【主】を知らない。イスラエルを行かせはしない」

(1) 世界観の対立(出エジプト記のテーマそのものである)

(2) パロの世界観

①エジプトには80の偶像あり。

②神道においては「八百万の神」(数が多い)がいる。

③エジプトの神々の頂点に君臨するのがパロである。

(3) パロは、どの神が自分よりも力があると言うのかと挑戦している。

(4) どの神が私に命令を下すことができるのかと豪語している。

(5) これは、私たち自身の姿でもある。

3. 2度目のパロへの言葉(3節)

「ヘブル人の神が私たちにお会いくださったのです。どうか今、私たちに荒野へ三日の道のりの旅をさせ、私たちの神、【主】にいけにえをささげさせてください。でないと、主は疫病か剣で、私たちを打たれるからです」

(1) 「ヘブル人の神」と言い換える。遠慮がちに。

(2) 私たちが会いに行ったのではなく、神の方から会いに来てくださった。

①モーセはシナイ山で

②アロンはエジプトで

(3) ですから、お願いを聞いてください。

(4) でないと、私たちは殺されるでしょう。

①この言葉は、彼らが独自に作り出したものである。

②全くのウソではなく、モーセの経験に基づく言葉である。

③パロの財産(奴隷)がなくなるという警告でもある。

4. 2度目のパロの反応(4～5節)

「モーセとアロン。おまえたちは、なぜ民に仕事をやめさせようとするのか。おまえたちの苦役に戻れ」

「見よ。今や彼らはこの地の人々よりも多くなっている。そしておまえたちは彼らの苦役を休ませようとしているのだ」

(1) パロはイスラエルの民が仕事を止めているという報告を受けていた。

(2) それで、首謀者の名前も知っていた。「モーセとアロン」

(3) イスラエルの民は、解放が実現すると信じて疑わなかった。

5. パロの命令(6～9節)

(1) 労働が強化される。

- ①出1：8～22 パロは恐れゆえにイスラエルの民を迫害した。
- ②出4：29～31 パロはイスラエルの民が希望を持ったために民を迫害した。

(2) エジプトの奴隷管理システム

- ①監督、人夫がしら
- ②その下にイスラエル人の人夫がしら

(3) 強化の内容

- ①なまけているから、おかしなことを言い始めるのだ。
- ②わらを与えるな。
- ③れんがの生産量はこれまでと同じにせよ。
- ④いつわりの言葉に関心を持たせるな。

6. パロの命令の実行(10～14節)

- (1) わらを自分で見つけて来い。
- (2) イスラエルの民は、代替品として刈り株を集めた(刈った後の株)。
- (3) 時間が経つに従って遠くまで行かねばならず、生産量は減少した。
- (4) 監督たちは、イスラエル人の人夫がしらを打ちたたいた。
- (5) 神の国と神の敵とが対決する時に、神の民が苦しむ。

「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました」(コロ1：13)

III. 揺れ動くイスラエルの指導者たち(15～21節)

1. パロへの直訴(15～16節)

- (1) パロは実情を知らないと思込んでいる。
- (2) 自分たちを「パロのしもべ」と呼び、保護を求めている。
- (3) れんがの生産量が落ちているのは、エジプト人の監督たちの責任である。

2. パロの回答(17～18節)

- (1) 予想外のものであった。
- (2) エジプトの監督たちは、パロの命令で動いていた。
- (3) パロは、モーセの言葉を返してきた。

「おまえたちはなまけ者だ。なまけ者なのだ。だから『私たちの【主】にいけにえをささげに行かせてください』と言っているのだ」

3. 怒りのはげ口 (19～21節)

- (1) 人夫がしらは、自分たちが苦境に立たされていることを知った。
- (2) モーセとアロンは、パロの様子を知るために彼らを迎えに出ていた。
- (3) 彼らの怒りは、モーセとアロンに向けられた。

「【主】があなたがたを見て、さばかれますように。あなたがたはパロやその家臣たちに私たちを憎ませ、私たちを殺すために彼らの手に剣を渡したのです」

- ①「荒野に3日の道のりを行かせ、…」と言ったことがまずかった。
- ②自分たちはなまけていてと誤解された。
- ③「彼らの手に剣を渡した」とは、彼らに口実を与えたことを示す慣用句。

IV. 自信をなくすモーセ (22～23節)

1. モーセもまた危機に直面した。

- (1) 4:29～31では、熱狂的な歓迎を受けた。
- (2) しかし、救出の提案がもたらしたものは、疑い、敵意、迫害だけであった。
- (3) その結果、モーセ自身が疑いを持つようになった。

2. 【主】への言葉

「主よ。なぜあなたはこの民に害をお与えになるのですか。何のために、私を遣わされたのですか」

- (1) 神は善なのか、悪なのか。
- (2) 神は約束を守るのか、守らないのか。
- (3) 私はなんのために派遣されて来たのか。羊飼いのままの方がよかった。

「私がパロのところに行って、あなたの御名によって語ってからこのかた、彼はこの民に害を与えています。それなのにあなたは、あなたの民を少しも救い出そうとはなさいません」

- (4) 「あなたの御名で語ってから」状態は悪化した。責任は神にある。
- (5) しかし、あなたは動こうとしない。

結論：このメッセージは、クリスチャン生活のケーススタディである。

1. クリスチャン生活のケーススタディ

- (1) 自分の問題が解決することを期待して、キリストを信じることがある。
- (2) クリスチャンは光と闇の戦いの中に入る。
- (3) キリストの警告

①マコ 8 : 34

②ルカ 14 : 28

(4) 神の約束は与えられているが、それが成就しない時のジレンマ

2. 神の計画の進展

(1) 神は直ちにイスラエルの民を救出することができた。

(2) 徐々にことを行う理由がある。

①パロに悔い改めの機会を提供している。

②恵みの啓示の進展

③力の啓示の進展

(3) 私たちの思い通りにならない時でも、神の計画は進展している。

3. 神の再発見

(1) 6 : 1 ~ 9 での神の自己啓示

(2) 「わたしは【主】である」

(3) 【主】という御名の意味を体験的に知って行く旅が、クリスチャン生活である。

【出エジ8】出エジプト記6章1節～27節

「契約の更新」

1. 文脈の確認

- (1) モーセはエジプトに入り、活動を開始した。
- (2) イスラエルの民は信じた。
- (3) パロは、モーセの要求を拒否した。
- (4) 結果は、より過酷な労役
 - ①れんがを作るためのわらが与えられない。
 - ②生産量は維持せねばならない。
- (5) 民はモーセを憎んだ。
- (6) モーセにとっての信仰の危機が訪れた。
 - ①神は約束を守る方なのか。
 - ②なんのために自分はエジプトに派遣されて来たのか。
 - ③事態が悪化しているのに、神はなぜ動こうとしないのか。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 救出の約束(1～8節)
- (2) 元の姿に戻るモーセ(9～13節)
- (3) モーセの系図(14～27節)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 神を新しく知る。
- (2) 信仰を回復する。
- (3) 系図の意味を理解する。

このメッセージは、神を新しく知り、信仰を回復するためのものである。

I. 救出の約束(1～8節)

1. モーセの質問への【主】からの回答

- (1) 何もしていないのではない。
- (2) 「今にあなたにわかる」

「今や、あなたは、わたしがファラオにすることを見るであろう」(新共同訳)

(3) パロはイスラエルの民をエジプトから出て行かせる。

(4) そればかりか、追い出してしまおう。

①「強い手」とは神の手

②比喩的言葉。神の主権による力がパロとエジプトに対して示される。

2. 神の自己啓示

(1) 「わたしは【主】である」

①「わたしは、『わたしはある』という者である」(3:14)と関係がある。

* 自立自存の神

* 自足している神

* すべてを包含している神

* いかなる限界もない神

②契約の御名

* 契約を守る神

* 変わることはない神

* 常に信頼できる神

(2) 「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに、全能の神として現れたが、」

①「全能の神」とは、「エル・シャダイ」。すべての必要を満たす神。

②アブラハムは99歳で子孫の約束を受けた(創17:1)。

③イサクがヤコブを祝福した(創28:3)。

④パダン・アラムから帰還したヤコブへの祝福(創35:11)

⑤子孫の祝福に関する使用法が多い。

(3) 「【主】という名では、わたしを彼らに知らせなかった」

①【主】は創世記に165回も出て来る。だから彼らはこの名を知っていた。

②【主】は出エジプトに398回も出て来る。

③ヘブル的には、名は単なるラベル以上のものであり、本質を表す。

④イスラエルの民は、【主】の意味を体験的に知っていたわけではない。

(4) 【主】という名は、契約を守る神の御名である。

①神は、イスラエルの民にカナンの地を与えるという契約を彼らと結んだ。

②その契約に基づいて、イスラエルの民をエジプトから解放することにした。

3. 民に語るべき3つの約束

(1) 「わたしは、あなたがたを贖う」

①伸ばした腕

②大いなる裁き(10の災害)

(2) 「わたしは、あなたがたの神となる」

①イスラエルは神の民となる。

②イスラエルは、【主】という御名の意味を体験的に知るようになる。

(3) 「その地を、あなたがたの所有として与える」

①アブラハム、イサク、ヤコブに語った内容

II. 元の姿に戻るモーセ (9～13)

1. モーセは命じられた通りにイスラエルの民に語った。

2. イスラエルの民は、モーセに耳を傾けなかった。

(1) 一度希望を持ったが、裏切られた。

(2) 落胆

(3) 激しい労役

3. 【主】からの語りかけ

(1) 民は放っておいて、パロに語れ。

「イスラエル人をエジプトから去らせよ」

4. モーセの応答

「ご覧ください。イスラエル人でさえ、私の言うことを聞こうとはしないのです。どうしてパロが私の言うことを聞くでしょう。私は口べたなのです」

(1) モーセもまた、落胆した。

(2) 人間の理屈を並べている。

(3) シナイ山麓で召命を受けた時の状態に戻っている(3:1～4:13)。

(4) 「わたしは口べた」を直訳すると「私は割礼のない唇です」。

(5) 比喩的に、不完全なものを差す。

①エレ6:10

「誰に向かって語り、警告すれば／聞き入れるのだろうか。見よ、彼らの耳は無割礼で／耳を傾けることができない。見よ、主の言葉が彼らに臨んでも／それを侮り、受け入れようとしない」(新共同訳)

②レビ26:41

「しかし、わたしが彼らに反抗して歩み、彼らを敵の国へ送り込んだのである。そのとき、彼らの無割礼の心はへりくだり、彼らの咎の償いをしよう」(新改訳)

③使7:51

「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです」(新改訳)

5. 神の命令

(1) モーセとアロンに語る。

①イスラエル人には、いかに行動すべきかを伝える。

②パロには、イスラエル人を去らせよと命じる。

(2) ブルドーザーのように前進する神。

①民の不信仰

②モーセとアロンの失敗

③パロの敵意

III. モーセの系図(14～27節)

1. ルベン、シメオン、レビで止まる。

(1) モーセとアロンを紹介するための系図が挿入句として入る。

(2) 4世代を紹介している。

2. レビの子の家系の名(レビは137年生きた)

(1) ゲルシオン

①リブニ

②シムイ

(2) ケハテ(133年生きた)

*ケハテは長子ではない。

①アムラム(137年生きた)

*アロン

・ナダブ(異なった火を捧げたので殺される。レビ10:1～7)

・アビフ()

・エルアザル(2代目の大祭司となる。民20:22～29)

ピネハス

・イタマル

*モーセ

②イツハル

*コラ(アロンの従兄である。モーセとアロンに敵対。民16:1～3)

- ・アシル
- ・エルカナ
- ・アビアサフ
- *ネフェグ
- *ジクリ
- ③ヘブロン
- ④ウジエル
- *ミシャエル
- *エルツァファン
- *シテリ
- (3) メラリ
- ①マフリ
- ②ムシ

結論：このメッセージは、神を新しく知り、信仰を回復するためのものである。

1. 神を新しく知る。

(1) エル・シャダイから【主】へ

(2) 「わたしは、あなたがたを贖う」

① 「贖う」の意味

- *親族が金を払って買い戻すこと
- *死から救うこと
- *エジプトから救出すること
- *捕囚から帰還させること

② 伸ばした腕 (天から地へ伸ばしたというイメージ)

- *第1の贖いでは、伸ばした腕によってパロの長子が打たれた。
- *第2の贖いでは、伸ばした腕によって神の子が打たれた。
- *私たちの罪を赦し、神との交わりを回復させるために (マタ 27:51)。

(3) 出エジプトを可能にした神は、日本のリバイバルも可能にするお方である。

2. 信仰を回復する。

(1) 民の落胆

(2) モーセの後戻り

(3) 2～8節は、「わたしは【主】である」で始まり、同じことばで終わっている。

(4) 自分に信仰があるかどうかではなく、神がどういうお方であるかが重要である。

3. 系図の意味を理解する。

- (1) 古代の異教の文学では、新しい神が登場し無力な神々に置き換わる。
- (2) 異教の神々は常に争っている。
- (3) 聖書の神は、人間が満たされた生涯を歩むことを願っている。
 - ①新しい方法で人間と係わり、人間を救おうとする。
 - ②しかしそれは、過去の啓示と調和した方法である。
- (4) モーセとアロンは、文脈を無視して突如現れたのではない。
 - ①アブラハム契約の延長線上にある。
 - ②神の啓示を受け取った民の中から、次の啓示を受け取る器が登場する。
- (5) 福音書の中のイエスの系図も同じ目的を持っている。
 - ①イエスの誕生は、アブラハム契約の延長線上に起こったことである。
 - ②イエスもまた、神の啓示を受け取った民の中から生まれたのである。
- (6) キリスト教は、歴史観である。

【出エジ9】出エジプト記6章28節～7章13節

「パロとの2度目の対決」

1. 文脈の確認

- (1) モーセはエジプトに入り、活動を開始した。
- (2) イスラエルの民は信じた。
- (3) パロは、モーセの要求を拒否した。
- (4) 結果は、より過酷な労役
- (5) 民はモーセを憎んだ。
- (6) モーセにとっての信仰の危機が訪れた(出5:22～23)。
- (7) 神はモーセに答え、再度彼を派遣しようとされた。
- (8) モーセとアロンの系図が挿入句のようにして出て来た。

2. メッセージのアウトライン

- (1) モーセの信仰の危機(6:28～30)
- (2) 危機を乗り越える(7:1～7)
- (3) パロとの2度目の対決(7:8～13)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 信仰の危機の本質を理解する。
- (2) 神の力を体験的に知る。
- (3) 悪魔との戦いの本質を知る。

このメッセージは、私たちが新しい信仰の次元に飛躍するためのものである。

I. モーセの信仰の危機(6:28～30)

1. 元の文脈に戻っている。

- (1) 系図が入っていた(6:14～27)。
 - ①レビの家系からモーセとアロンが出ている。
 - ②この系図は、何世代かの省略がある。
 - ③6:18ケハテとアムラムの間に省略があると思われる。「子」とは「子孫」。
 - ④モーセとアロンは、アブラハム、イサク、ヤコブ、レビの子孫である。
- (2) 6:12と6:30は同じ。

2. モーセが信仰の危機に陥った理由

- (1) 神には約束を守る力があるのか。
- (2) 神には約束を守る気があるのか。
- (3) 自分はなんのために遣わされて来たのか。
- (4) 事態が悪化しているのに、神はなぜ動こうとしないのか。
- (5) 要約すると、モーセの期待(予想)と神の計画の間にギャップがあるのである。

3. 神が見えなくなると、自分の弱点が大きく見え始める。

- (1) 「私は口べたです」(無割礼の唇)
- (2) 出4:10で語っていた言い訳である。

II. 危機を乗り越える(7:1~7)

1. 神の忍耐

- (1) 神はモーセを見放してはいない。
- (2) 再びモーセの不安に答えている。
 - ① 兄アロンが代弁者となる。
 - ② 「イスラエル人を去らせよ」というメッセージをパロに語る。

2. 聖書の啓示のパターンが見られる。

- (1) 神 → 預言者 → 民
- (2) モーセ → アロン → パロ

3. 神は、これから起ころうとしていることを再度モーセに啓示する。

- (1) パロは心を頑なにするであろう。
- (2) その結果、エジプトは大きな裁き(しるしと不思議)を受けることになる。
 - ① エジプト全体に裁きが下る理由は、反ユダヤ主義政策が採用されたから。
 - ② また、エジプト人全員がその政策を実行するようになったから。
- (3) 【主】はイスラエル人をエジプトから連れ出される。
- (4) エジプト人もまた、「わたしが【主】であることを知る」
 - ① 奴隷の神が彼らの神々より強いことを知るようになる。
 - ② 【主】とは契約の神の御名
 - ③ 出エジプトが成就するかどうかは、【主】の名誉がかかった戦いである。
 - ④ エジプト人は、イスラエルの神が契約を守る力を持った方であることを知る。

4. モーセは信仰の危機を脱した。

(1) 7：6に勝利の秘訣がある。

「そこでモーセとアロンはそうした。【主】が彼らに命じられたとおりにした」

(2) 神のプログラムを理解した。

5. モーセは80歳、アロンは83歳

(1) 2人の先祖たちの平均年齢は、130～140歳。

(2) D・L・ムーディーは、モーセの人生をこのようにまとめている。

①最初の40年間：パロの宮殿で自分がひとかどの人物であることを学んだ。

②次の40年間：荒野で自分が何者でもないことを学んだ。

③最後の40年間：神が無力な者を用いて業を行う方であることを学んだ。

(3) 80歳という年齢をどう見るか。

①経験、判断力の面で充実している。

②自分を証明する必要がなくなっている年齢ではないか。

III. パロとの2度目の対決(7：8～13)

1. 杖が蛇に変わる奇跡

(1) モーセとアロンはパロのところに行き、【主】が命じられたとおりに行った。

(2) モーセが命じ、アロンが杖をパロと家臣たちの前に投げた。

(3) それは、蛇になった。

2. エジプトの知者、呪術者も、秘術を使って同じことをすることができた。

(1) その秘術は単なる「マジック」ではなく、悪魔的なものであろう。

(2) IIテモ3：3

「また、こういう人々は、ちょうどヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らうのです。彼らは知性の腐った、信仰の失格者です」

①ユダヤ人の伝承

②ヤンネとヤンブレは、呪術者集団の長である。

(3) サタンも奇跡を行うことができる。

(4) 「しるし」のコピーを作り出すことが何度か繰り返される。

①7：22「ナイルの水」

②8：7「かえる」

③8：19「ぶよ」の奇跡は出来なかった。「これは神の指です」

3. しかし、アロンの杖が彼らの杖を飲み込んだ。

(1) これは、神の力がサタンの力よりも強いことを表わしている。

4. パロの心は頑なになった。

(1) 【主】がおおせられたとおりであった。

(2) モーセは動揺しない。

結論：このメッセージは、私たちが新しい信仰の次元に飛躍するためのものである。

1. 信仰の危機の本質を理解する。

(1) 戦後の日本の教会

①マッカーサーが5000人の宣教師を要請した頃

②経済成長とともに、教会成長の力は消えて行った。

③現在の日本の教会には、閉そく感が漂っている。

(2) 教会難民の存在

①各種調査によれば、日本の教会数、礼拝出席人数は減少している。

②個人的な感想では、クリスチャン人口は増えている。

③教会難民の存在。

(3) 団塊の世代の憂うつ

①青年時代の信仰を忘れている。

②いわば、ミデヤンの野の羊飼いに戻っている人々がいる。

③彼らは、飛躍のきっかけを探している。

2. 神の力を体験的に知る。

(1) 自分の期待(予測)から神の計画へと視点を変える。

(2) みことばの約束、信頼、実行、体験という順番が大切である。

①信仰を持った初期の段階で、この順番を学ぶ必要がある。

②その逆はあり得ない。

(3) 聖書の例

①ガリラヤ湖畔の弟子たち(ヨハ21章)

②コリントでのパウロ(使18:9~11)

3. 悪魔との戦いの本質を知る。

(1) 奇跡を判定する基準は、神のことばと一致しているかどうかである。

①申13:1~5 しるしや不思議を吟味せよ。

②申 18：15 「私のようなひとりの預言者」とは、メシアのこと。

③申 18：20～22 真の預言者を見分ける方法

(2) 終末時代、反キリストが現れ、奇跡によって人々を惑わし、礼拝を要求する。

①Ⅱテサ 2 章には、「不法の人」の出現に関する預言がある。

②黙 13 章には、「海から上がってくる一匹の獣」に関する預言がある。

③奇跡を吟味する力を養う必要がある。

4. 以上の結論を可能にする秘訣は、聖書研究である。

【出エジ10】出エジプト記7章14節～25節

「エジプトに下る災い」

1. 文脈の確認

- (1) モーセは信仰の危機を乗り越え、パロとの2度目の対決を果たす。
- (2) アロンの杖は蛇に変わった。
- (3) エジプトの呪法師たちも同じことをした。
- (4) アロンの杖は彼らの杖を呑みこんだ。
- (5) それでもパロは、心を頑なにした。
- (6) いよいよ、エジプトに10の災いが下る。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 10の災い
 - ①目的
 - ②7つの特徴
- (2) 最初の災い
 - ①警告
 - ②実行
 - ③結果

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 聖書の記述の美しさ
- (2) 神以外のものに頼る愚かさ
- (3) 神の計画に参加する喜び

このメッセージは、神の計画に参加する喜びを教えてくれるものである。

I. 10の災い

1. 目的

- (1) イスラエルの民を解放するため
- (2) エジプトを裁くため
- (3) 偶像礼拝の愚かさを教えるため

2. 7つの特徴

(1) 形式

- ① $3 \times 3 + 1 = 10$
- ② 3つが1セットで、それが3回ある。
- ③ 最後はフィナーレである。

(2) 警告

- ① 各セットの中の最初の2つは、災いの前に警告が与えられる。
- ② 各セットの3番目は、警告なしに災いが下る。

(3) モーセの立ち位置

- ① 各セットの中の1番目は、モーセが朝パロの前に立つ。
- ② 各セットの中の2番目は、モーセはパロの前に立つが、時間は不明。
- ③ 各セットの中の3番目は、モーセはパロの前に立たない。

(4) 呪法師の反撃

- ① 最初の2つは呪法師の反撃があるが、それ以降はない。
- ② 悪魔の限界を露呈している。

(5) 災いの範囲

- ① 最初の3つは、エジプト全土に下る。
- ② 後半の6つは、エジプト人のみに下り、イスラエル人には下らない。

(6) 動作の主体

- ① 最初の3つは、アロンの手
- ② 次の3つは、神の手
- ③ 最後の3つは、モーセの手

(7) 災いの程度

- ① 最初の3つは、煩わしいもの
- ② 次の3つは、苦痛なもの
- ③ 最後の3つは、悲痛なもの

II. 最初の災い

1. 警告(14～18節)

- (1) 朝、パロの前に立つ。
- (2) パロは、ナイルに出て来る。
 - ① ナイルなしにエジプトに命はない。
 - ② エジプト人たちは、ナイルを「エジプトの母」として礼拝した。
 - ③ ここは、パロの朝のデボーションか？

(3) 杖を持ってパロに警告する。

「あなたは次のことによって、わたしが【主】であることを知るようになる」

①杖でナイルの水を打つ。

②水は血に変わる(いわゆる赤潮であろう。自然現象が強く現れる)。

③ナイルの魚は死ぬ。

④ナイルは臭くなる。

⑤エジプト人はナイルの水を飲むことを忌み嫌うようになる。

(4) この災いの時期は、10月から11月にかけてであろう。

①エジプトの農業は、ナイル川に全面的に依存していた。

②ナイル川の増水は、毎年定期的にやって来た。

③洪水ではない増水で、川幅が8倍になることもあった。

④川の氾濫により、塩分が流され、肥沃な土壌が運ばれて来た。

⑤増水は7月中旬から始まり、3カ月後には水が引き始める。

⑥水が引くと、種を蒔く時期になる。

⑦第一と第二の災いは、ナイルが増水し、その水が引いて行く時期に行われた。

⑧第十の災いは春にやって来たので、10の災害は約半年間で起こった。

2. 実行(19～21節)

(1) 動作の主体は、アロンである。

(2) 被害が広範囲に及ぶ。

(3) 「木の器や土の器」とは、偶像に捧げ物をするための器である。

①そこにも血があるようになる。

(4) 【主】の命令通りに実行した。

(5) ナイルの水はことごとく血に変わった。

①魚は死んだ。

②ナイルの水は臭くなった。

③エジプト人はナイルの水を飲むことができなくなった。

3. 結果(22～25節)

(1) エジプトの呪法師たちも同じことをした。

①真水を見つけて、それを血に変えた。

②エジプト人にとっては、なんの助けにもならない。

③彼らは、血を真水に変えるべきである。

(2) パロの心は頑なになった。

①自分の家に入った。引きこもり現象(アダムとエバも同じ)。

- ②これを心に留めなかった。無責任(神の裁きはないことにしよう)。
- ③パロは飲み水に困らなかった。
- (3) エジプト人は、飲み水を求めて井戸を掘った。
- (4) その状態が7日間続いた。
 - ①エジプト人の多くが死んだ(紀元1世紀のユダヤ人哲学者フィロンの意見)
 - ②野菜、果物から水分を取った。
 - ③井戸や泉からの真水を飲んだ。

結論: このメッセージは、神の計画に参加する喜びを教えてくれるものである。

1. 聖書の記述の美しさ

- (1) 裁きの中にある形式美
 - ①勝つだけではだめ
 - ②美しく勝つ必要がある。
- (2) いわば横綱相撲である。
 - ①勝つだけではだめ
 - ②美しく勝つ必要がある。
- (3) 聖書研究の喜び
 - ①真理の発見
 - ②啓示の美の発見

2. 神以外のものに頼る愚かさ

- (1) 日本の現状初詣の人数1億人前後(警察庁発表)
- (2) 裁かれたエジプトの神々
 - ① Nile River ナイル川(聖なる川)
 - ② Khnum クヌム(ナイル源流の守り神)
 - ③ Hapi ハピィ(ナイルの霊)
 - ④ Osiris オシリス(死後の世界を司る。ナイルはオシリスの血流)
 - ⑤ Sepek セペク(ワニの守り神)
 - ⑥ Neith ネイト(ラテスというナイル最大の魚の守り神)
 - ⑦ Hathor ハトホル(クロミス-スズメダイの一種-の守り神)

3. 神の計画に参加する喜び

- (1) 信仰の危機を乗り越え、神の計画に沿って動き出したモーセ
- (2) 神の計画が成就するための役割を担う。
- (3) そして、自分もその計画の成就の一部となる。

【出エジ11】出エジプト記8章1節～19節

「最初の3つの災い」

1. 文脈の確認

- (1) エジプトに主からの10の災いが下る。
- (2) 10の災いの記述は、考え抜かれた形式美を持っている。
- (3) $3 \times 3 + 1 = 10$ という形式になっている。
- (4) きょうは最初の3つの災いを取り上げる。
- (5) 補足説明：ヘブル語聖書では、8：1～4までは7章に入っている。
8章は、8：5から始まる。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 第一の災い(復習)：ナイルの水が血に変わる。
- (2) 第二の災い：かえるの害
- (3) 第三の災い：害虫(ぶよ)の害

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 「偶像礼拝」について考えてみよう。
- (2) 「いのち」について考えてみよう。
- (3) 「復活」について考えてみよう。

このメッセージは、人生そのものを考えさせるものである。

I. 第一の災い(復習)：ナイルの水が血に変わる。

1. 警告(7：14～18)

- (1) 各セットの中の最初の2つは、災いの前に警告が与えられる。
- (2) 各セットの中の1番目は、モーセが朝パロの前に立つ。

2. 実行(7：19～21)

- (1) 動作の主体：最初の3つは、アロンの手。
- (2) ナイルの水はことごとく血に変わった。
- (3) 災いの範囲：最初のセットは、害がエジプト全土に下る。

3. 結果(7:22~25)

- (1) 災いの程度:最初の3つは、煩わしいもの。
- (2) エジプトの呪法師たちも同じことをした。
- (3) パロの心は頑なになった。
 - ①わずかばかりの奇跡でも、説得されてしまう。最初から信じる気がない。

II. 第二の災い:かえるの害(8:1~15)

1. 警告(8:1~4)

- (1) 各セットの中の最初の2つは、災いの前に警告が与えられる。
- (2) 各セットの中の2番目は、モーセはパロの前に立つが、時間は不明。
- (3) かえるは、エジプト人には歓迎すべきものである。
 - ①エジプトの農業は、ナイル川に全面的に依存していた。
 - ②ナイル川の増水は、毎年定期的にやって来た。
 - ③増水は7月中旬から始まり、3カ月後には水が引き始める。
 - ④水が引くと、種を蒔く時期になる。かえるが現れる時期と合致する。
- (4) そのかえるが、災いをもたらすものとなる。
 - ①自然現象が、神の力によって極端なものに変えられる。

2. 実行(8:5~6)

- (1) 動作の主体:最初の3つは、アロンの手。
- (2) 災いの範囲:最初の3つは、害がエジプト全土に下る。

3. 結果(8:7~15)

- (1) 災いの程度:最初の3つは、煩わしいもの。
- (2) エジプトの呪法師たちも同じことをした。
 - ①人々にとっては迷惑なことであった。
 - ②彼らは、かえるを取り除くことができなかった。
- (3) パロはモーセとアロンに願った。

「パロはモーセとアロンを呼び寄せて言った。『かえるを私と私の民のところから除くように、【主】に祈れ。そうすれば、私はこの民を行かせる。彼らは【主】にいけにえをささげることができる』」
- (4) モーセは「時間の指定」を迫った。
 - ①神の力を疑わせないために。

(5) パロは、「あす」と答えた。

①ひょっとしたら、事前に解決する可能性がある。

②エジプトの常識では、儀式を行うのにこれくらいの時間がかかる。

③聖書の教え

「きょう、もし御声を聞くならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにはならない」(ヘブ3:15)

(6) モーセの答え。「あなたのことばどおりになりますように」

①「私たちの神、主のような方はほかにいないことを、あなたが知るためです」

②7:17でモーセは語っていた。

③イスラエル人を救出するのは、神々の中のひとりなのか、真の神【主】なのか。

(7) モーセの祈り

①主の計画は必ず成就する。

②それが成就する方法は、祈りである。

(8) かえるは死に絶え、ナイルにだけ残った。

①かえるの死骸で地は臭くなった。

②パロは心を頑なにした。

III. 第三の災い：害虫(ぶよ)の害(8:16～19)

1. 警告：各セットの中の3番目には警告はない。

2. 実行(8:16～18)

(1) 動作の主体：最初の3つは、アロンの手。

(2) 災いの範囲：最初の3つは、害がエジプト全土に下る。

(3) 「ぶよ」とあるが、これはヘブル語では一般的な言葉で、「種々の害虫」のこと。

3. 結果(8:19)

(1) 災いの程度：最初の3つは、煩わしいもの。

(2) エジプトの呪法師たちは、同じことができなかった。

「これは神の指です」

(3) パロの心は頑なになった。

結論：このメッセージは、人生そのものを考えさせるものである。

1. 「偶像礼拝」について考えてみよう。

(1) 第2の災いによって裁かれた神

③ Hapi ハピィ (ナイルの霊。堆積物を管理し土地を豊穡にする神。乳房と妊婦の腹を持つ)

⑧ Heqt ヘクト (体は女性で顔はかえる。クヌムの妻。復活と豊穡の象徴)

(2) 第3の災いによって裁かれた神

⑨ Uatchit ウアトウッチット(害虫からエジプト人を守る女神。コブラの頭に赤い王冠)

⑩ Seb セブ (地の神。害虫から人々を守る)

(3) エジプトの祭司たちも辱めを受けた。

①彼らは、昆虫による汚れを受けないために、毛を剃っていた。

②祭司たちもまた、昆虫による災いを受けた。

(4) エジプトの呪法師たちも敗北した。

①同じことをできなかった。

②神の業を消し去ることはできなかった。

2. 「いのち」について考えてみよう。

(1) エジプト人にとっては、ナイル川は「いのちの母」であった。

(2) 最初の災いによって、ナイル川に生息する「いのち」は死んだ。

(3) 第2の災いによって、「かえる」(いのちあるもの)が大量に造られ、死んだ。

(4) 命を支配しておられるのは、ヤハウエ(【主】)であることが明らかになった。

「私たちの神、【主】のような方はほかにはいないことを、あなたが知るためです」

3. 「復活」について考えてみよう。

(1) エジプトは「両生類」を尊重した。

(2) 2つの世界で生きることが出来る。

①おたまじゃくしは、水の中。

②かえるは、陸上。

(3) エジプト人は来世へのこだわりを持っていた(永遠の来世の存在を信じていた)。

(4) 日本人の来世観(仏教+民間信仰)

①死んで7日目に三途の川を渡る。

②流れの速度の異なる3つの瀬があり、生前の業によってどこを渡るか決まる。

③此岸(しがん)から彼岸(ひがん)に行く。

④その結果、極楽に行くか地獄に行くかが決まる。

(5) エジプトでは、死後、オシリス神の法廷で審判を受けるとされていた。

①「死者の書」が棺や、ミイラを巻く布に入れられた。

②それは、死後の試練を乗り越えるための手引書である。

(6) 聖書に解決がある。

①イエスのことば ヨハ 11:25

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか」

②パウロのことば IIコリ 5:21

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです」

③パウロのことば IIテモ 4：1

「神の御前で、また、生きている人と死んだ人とを裁かれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思って、私はおごそかに命じます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい」

【出エジ12】出エジプト記8章20節～9章12節

「次の3つの災い」

1. 文脈の確認

- (1) エジプトに主からの10の災いが下る。
- (2) 10の災いの記述は、考え抜かれた形式美を持っている。
- (3) $3 \times 3 + 1 = 10$ という形式になっている。
- (4) きょうは次の3つの災いを取り上げる。
- (5) 補足説明：ヘブル語聖書では、8：1～4までは7章に入っている。
8章20節は、ヘブル語聖書では8章16節である。
- (6) イスラエル国家誕生の背景、私たちの歴史でもある。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 第四の災い：昆虫（あぶの群れ）（英語では flies）の害
- (2) 第五の災い：疫病
- (3) 第六の災い：腫物

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 偶像礼拝の愚かさ
- (2) 信じる者に対する神の守り
- (3) イスラエルに対する姿勢

このメッセージは、人生そのものを考えさせるものである。

I. 第四の災い：昆虫（あぶの群れ）（英語では flies）の害

1. 警告（8：20～23）

- (1) 各セットの中の最初の2つは、災いの前に警告が与えられる。
- (2) 各セットの中の1番目は、モーセが朝パロの前に立つ。
- (3) 「わたしの民を行かせ、彼らをわたしに仕えさせよ」
 - ①単なる解放ではなく、神とイスラエルの民の関係の構築
 - ②神は、礼拝する民を作ろうとしておられる。
 - ③幕屋、モーセの律法、使命
 - ④クリスチャンになった目的はなにか。

(4) もし拒むなら、「あぶの群れ」を送る。

①種々の昆虫

②パロの家から庶民の家まで、エジプト全土にあぶが満ちる。

(5) エジプトは、昆虫を崇拜した。

①昆虫には、死を命に変える力があるように感じた。

②蠅は、腐敗した物の中から誕生する。

③神の皮肉：「昆虫をそれほど信頼するのなら、すべて与えよう」

(6) 第4の災いから、イスラエル人とエジプト人の区別が始まり、最後まで続く。

「わたしはその日、わたしの民がとどまっているゴシェンの地を特別に扱い、そこには、あぶの群れがないようにする。それは【主】であるわたしが、その地の真ん中にいることを、あなたが知るためである」(22節)

2. 実行(8:24)

(1) 動作の主体：次の3つは、神の手

(2) 【主】が警告された通りになった。

(3) 災いの範囲：エジプト全土に広がったが、ゴシェンは守られた。

3. 結果(8:25～32)

(1) 災いの程度：次の3つは、苦痛なもの。

(2) パロの妥協(1)

①弱気になって来た。

②エジプト国内で、神にいけにえを捧げよ。

(3) モーセの答え

①それは、エジプト人の偏見と習慣から考えて不可能である。

②創46:34

③エジプトはイスラエル人を石で打つだろう。

④出エジプトの目的は、神の民となること。「【主】にいけにえをささげる」

(4) パロの妥協(2)

①荒野に行くことを許可する。

②ただし、決して遠くに行ってはならない。

③私のために祈ってくれ。

④ヤコ1:8

「そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です」

(5) モーセの答え

①「私は【主】に祈ります」

*執りなしの祈りを実践するモーセ。後にこれが必要になる。

*エジプト人を苦境に置いておきたいという誘惑が働く。

*敵のために祈る能力

②あす、昆虫(あぶの群れ)は離れる。

③重ねて欺かないように。

(6) モーセの祈りは叶えられた。

(7) パロはこの時も強情になる。

II. 第五の災い：疫病(9:1~7)

1. 警告(9:1~5)

(1) 各セットの中の最初の2つは、災いの前に警告が与えられる。

(2) 各セットの中の2番目は、モーセはパロの前に立つが、時間は不明。

(3) 野にいる家畜に激しい疫病が下る。全滅ではない。

①小屋の中にいる家畜は、助かった。第六の災い(腫物で)苦しむ。

②馬は神性で、礼拝の対象。牛、雄羊なども同じ。

(4) イスラエルの家畜とエジプトの家畜は区別される。

①イスラエル人の家畜は1頭も死ななかった。

②マタ10:29

「二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません」

(5) 時を定めてこれを行う。

①あす

②【主】の業であることが明白になる。

③自然現象をすべて支配しておられる【主】

2. 実行(9:6)

(1) 動作の主体：次の3つは、神の手。

(2) 災いの範囲：次の3つは、エジプトのみに下り、イスラエル人は守られる。

3. 結果(9:7)

(1) 災いの程度：次の3つは、苦痛なもの。

(2) イスラエル人の家畜は1頭も死んでいなかった。

(3) パロの心は強情になった。

III. 第六の災い：腫物（9：8～12）

1. 警告：各セットの中の3番目には警告はない。

2. 実行（9：8～10）

(1) 動作の主体：次の3つは、神の手。

①最初の3つは、アロンが杖を指し伸ばす。

②最後の3つは、モーセが杖を指し伸ばす。

③ここでは、モーセとアロンが「すす」を天に向けてまいているが、主体は神。

(2) エジプト全土の人と獣につき、うみが出る腫れものとなった。

①ゴシェンの地は守られた。

3. 結果（9：11～12）

(1) 災いの程度：次の3つは、苦痛なもの。

(2) エジプトの呪法師たちは、腫物のためにパロの前に立つことができなかった。

(3) 第5と第6の災いは、自然に消滅したと思われる。

(4) パロの心は頑なになった。

結論：このメッセージは、人生そのものを考えさせるものである。

1. 「偶像礼拝」の愚かさ

(1) 第四の災いによって裁かれた神

① Baalzebub ベルゼバブ（蠅の主。ベルゼブル）

* マタ 12：24～32 参照

(2) 第五の災いによって裁かれた神

② Apis Bull エイピス・ブル（初子の聖牛。プター（Ptah）の生まれ変わり。野で飼われていた）

③ Mnevis ムネヴィス（聖牛。太陽神ラー（Ra）の象徴）

④ Knom ノム（雄羊の頭を持った神。創造神）

(3) 第六の災いによって裁かれた神

⑤ Sekhmet セクメット（雌獅子の頭を持った女神。疫病を支配する。戦いと破壊の女神）

⑥ Serapis セラピス（癒しの神）

⑦ Imhotep イムホテプ（薬の神。実在の人物の神格化）

2. 神の守り

(1) 出8：23

「わたしは、わたしの民とあなたの民との間を区別して、救いを置く。あす、このしるしが起こる」

①直訳は、「わたしの民とあなたの民の間に、贖いを置く」である。

②ノアの洪水の時：船の中の人々と外の人々

③マラ3：18

「あなたがたは再び、正しい人と悪者、神に仕える者と仕えない者との違いを見るようになる」

④3本の十字架

3. イスラエルに対する姿勢

(1) 10の災い自体がエジプトの反ユダヤ主義への裁きである。

(2) 「かまどのすす」

①レンガを焼くかまど（キブシャン）

②イスラエル人の苦難の象徴

③そのかまどから取られた「すす」である。

(3) 創12：3

「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」

①イスラエルを呪う者は呪われる。

②同じ種類の呪いが返る。

(4) 聖書研究からリバイバルが始まる。

①神の偉大さを認識し、たたえる。

②ヘブル的に聖書を読む。

③イスラエルを祝福する者となっていく。

【出エジ13】出エジプト記9章13節～10章29節

「最後の3つの災い」

1. 文脈の確認

- (1) エジプトに主からの10の災いが下る。
- (2) 10の災いの記述は、考え抜かれた形式美を持っている。
- (3) $3 \times 3 + 1 = 10$ という形式になっている。
- (4) きょうは最後の3つの災いを取り上げる。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 第七の災い：雹
- (2) 第八の災い：いなご
- (3) 第九の災い：暗やみ

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 偶像礼拝の愚かさ
- (2) パロの頑なさ
- (3) 【主】という御名

このメッセージは、人生そのものを考えさせるものである。

I. 第七の災い：雹（9：13～35）

1. 警告（9：13～19）

- (1) 各セットの中の最初の2つは、災いの前に警告が与えられる。
- (2) 各セットの中の1番目は、モーセがパロの前に立つ。時間は朝。
- (3) 「わたしの民を行かせ、彼らをわたしに仕えさせよ」
 - ①単なる解放ではなく、神とイスラエルの民の関係の構築。
 - ②神は、礼拝する民を作ろうとしておられる。
- (4) 災いの目的
 - ①エジプト人に【主】がどのようなお方であることを教えるため。
- (5) 雹が降る。
 - ①あすの今ごろ
 - ②エジプトにおいて建国の日以来、なかったこと。

③きわめて激しい雹

(6) 警告

- ①野にいる人を避難させよ
- ②野にいる家畜を避難させよ

2. エジプト人の2種類の反応(9:20~21)

(1) 教訓を学びつつある人

(2) 教訓を学ばない人

- ①プライドは、合理的な思考を停止させる。
- ②偶像礼拝は、真の神への恐れを停止させる。

3. 実行(9:22~26)

(1) 動作の主体:最後の3つは、モーセの手

(2) 【主】が警告された通りになった。

(3) 雷と雹。火がひらめき渡った。

- ①雹は、エジプトでは年に3日ほど。
- ②雷が伴うことは皆無である。
- ③火が伴うのは、超自然現象である。

(4) 被害の対象

- ①野にいた人
- ②野にいた獣
- ③野の草
- ④野の木

(4) 災いの範囲:エジプト全土に広がったが、ゴシェンは守られた。

4. 結果(9:27~35)

(1) パロの告白

- ①私は罪を犯した。
- ②【主】は正しいお方だ。
- ③【主】に祈ってくれ。
- ④私はおまえたちを行かせよう。

(2) モーセの回答

- ①私が町を出たら、すぐに【主】に祈ろう
- ②そうすれば、雹は降らなくなる。
- ③この地が【主】のものであることをあなたが知るためである。

④しかし、パロとその家臣の【主】への恐れは本物ではない。

(3) 時期

①大麦が穂を出し、亜麻がつぼみをつけるのは、1月～2月。

②小麦とスペルト小麦(裸麦)は、3月～4月に実をつける。

(4) パロとエジプト人は、再び頑なになった。

II. 第八の災い：いなご(10：1～20)

1. 警告(10：1～6)

(1) 各セットの中の最初の2つは、災いの前に警告が与えられる。

(2) 各セットの中の2番目は、モーセはパロの前に立つが、時間は不明。

(3) 目的

①エジプト人が信じるように、しるしを行う。

②エジプトの中で【主】が行われたことを、息子や孫に語って聞かせるため。

③【主】は契約を守るお方であることを、イスラエル人が知るため。

(3) いなごが地の面をおおう。

①あす

②地は見えなくなる。

③雹の害を免れた植物が食いつくされる。

④野だけではなく、パロの王宮にもエジプト人たちの家にも満ちる。

⑤エジプトの歴史上なかったことである。

2. 応答(10：7～11)

(1) 家臣たちの応答

①彼らは教訓を学んだ。

②パロへの進言

*パロの知恵と力を疑い始めている。

*パロの神性をも疑い始めている。

(2) パロはモーセとアロンを呼び戻した。

①いったいだれが行くのか。

②全員が、全家畜を連れて出て行く。

③パロは壮年の男だけを行かせようとした。

④「悪意はおまえたちの顔に現れている」(新改訳)

「お前たちの前には災いが待っているのを知るがよい」(新共同訳)

⑤「壮年の男だけ行って、【主】に仕えよ」

3. 実行(10:12～15)

- (1) 動作の主体：最後の3つは、モーセの手。
- (2) 災いの範囲：エジプトのみに下り、イスラエル人は守られる。
- (3) 終日終夜東風が吹き、朝になると東風がいなごの大軍を運んできた。
- (4) エジプト全土にわたって、緑色は少しも残らなかった。

4. 結果(10:16～20)

- (1) 災いの程度：最後の3つは、悲痛なもの。
- (2) パロの悔い改め
- (3) モーセの執りなしの祈り
- (4) 強い西風が吹き、いなごは追いやられた。
- (5) パロは再び頑なになった。

III. 第九の災い：暗やみ(10:21～29)

1. 警告：各セットの中の3番目には警告はない。

2. 実行(10:21～23)

- (1) 動作の主体：最後の3つは、モーセの手。
- (2) エジプト全土は3日間真っ暗闇になった。
 - ①ゴシェンの地は守られた。

3. 結果(10:24～29)

- (1) 妥協案
 - ①幼子が行ってもいいが、家畜は置いていけ。
 - ②エジプトの家畜は死んでいた。
- (2) モーセはそれを拒否
 - ①荒野に行くまでは、どの動物をいけにえにするのか不明である。
 - ②実際、モーセの律法が与えられるのは、シナイ山に着いてからのこと。
- (3) パロの心は頑なになった。
- (4) 両者が交渉のために顔を合わせることは、2度とない。

結論：このメッセージは、人生そのものを考えさせるものである。

1. 「偶像礼拝」の愚かさ

(1) 第七の災いによって裁かれた神

⑮ Shu シュー (太陽神ラの息子。天空の神)

⑯ Nut ヌト (天空の女神)

⑰ Seth セト (農業神)

⑱ Isis イッシス (農業の女神)

(2) 第八の災いによって裁かれた神

⑰ Seth セト (農業神)

⑱ Isis イッシス (農業の女神)

(3) 第九の災いによって裁かれた神

⑮ Shu シュー (太陽神ラの息子。天空の神)

⑯ Nut ヌト (天空の女神)

⑳ Ra ラ (太陽神)

㉑ Khepri ケプリ (フンコロガシの頭を持つ太陽神。糞を丸くする力が太陽を動かす力と考えられた)

㉒ Harakhte ホラクティ (鷹の頭を持った太陽神)

㉓ Aton アトン (日輪像。太陽神)

㉔ Horus ホルス (両眼が月と太陽である天空の神。ハヤブサの頭を持つ)

㉖ Atum アトゥム (夕陽の神)

㉘ Thoth トト (月の神)

2. パロの頑なさ

(1) 神はパロが頑なになることを許された。

(2) これは、なぜ10の災いが必要かということと関係している。

①エジプト人を解放するだけなら、1度の災いでいい。

(3) 目的

①エジプト人に、【主】とは誰かを教えるため。

②イスラエルの民に、【主】とは誰かを教えるため。

*イスラエルの民は、子孫の代までこれを記憶するのである。

③全世界に、【主】とは誰かを教えるため。

3. 【主】という御名

(1) 9 : 14

(2) 10 : 2

(3) 【主】とは契約を守る神という意味である。

【出エジ14】出エジプト記11章1節～10節

「第十の災いの予告」

1. 文脈の確認

- (1) エジプトに主からの10の災いが下る。
- (2) 10の災いの記述は、考え抜かれた形式美を持っている。
- (3) $3 \times 3 + 1 = 10$ という形式になっている。
- (4) きょうの箇所は、フィナーレへの準備である。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 【主】からモーセに(1～3節)
- (2) モーセからパロに(4～8節)
- (3) 9つの災害のまとめ(9～10節)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 偶像礼拝の愚かさについて
- (2) 神がなさる区別について
- (3) 賜物について

このメッセージは、人生そのものを考えさせるものである。

I. 【主】からモーセに(1～3節)

1. 挿入句である

- (1) 10:29と11:4とはつながっている。
- (2) 11:1～3は、【主】がモーセにすでに語っておられた内容である(英語の過去完了形)。

2. なお一つの災いが下る。

- (1) その後で、パロはイスラエルの民を去らせる。
- (2) 大人も、子どもも、男も、女も、家畜も、あらゆるものがエジプトを去る。

3. エジプトから財産を求めるように

- (1) 銀の飾りや金の飾り。それ以外の物もあったはずである。
- (2) これは、長年にわたる賃金の取り分である。

(3) 【主】は、労働者に正当な賃金が支払われることを願われる。

「パロの娘は彼女に言った。『この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私があなたの賃金を払いましょう』。それで、その女はその子を引取って、乳を飲ませた」(出2：9)

「あなたの隣人をしいたげてはならない。かすめてはならない。日雇い人の賃金を朝まで、あなたのもとにとどめていてはならない」(レビ19：13)

(申15：18、24：15など参照)

「見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。そして、取り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています」(ヤコ5：4)

4. エジプト人の心理の変化(3節)

【主】はエジプトが民に好意を持つようにされた。モーセその人も、エジプトの国でパロの家臣と民とに非常に尊敬されていた」(新改訳)

「主は民にエジプトびとの好意を得させられた。またモーセその人は、エジプトの国で、パロの家来たちの目と民の目とに、はなはだ大いなるものと見えた」(口語訳)

(1) エジプト人から無理やり財産を奪うのではない。

(2) 9つの災いの結果、エジプト人たちはイスラエル人に好意を持つようになった。

①さらに第十の災いが下る。より尊敬するようになる。

(3) モーセは、偉人と見なされた。

①彼が予告した通りに災いが下った。

②彼が祈ると、災いは止んだ。

③彼に逆らうと大変なことになる。

II. モーセからパロに(4～8節)

1. 10：29の続きである。

(1) 「真夜中ごろ、わたしはエジプトの中に出て行く」

①擬人法

②アビブの月(ニサンの月)の14日

③朝、あるいは昼間に、モーセはこれをパロに語っている。

④夕暮れに子羊をほふる。

⑤その夜それを食べる。ユダヤ暦では15日になっている。

⑥真夜中ごろ、裁きが行われる。

2. 初子が打たれる。

- (1) 民族の存続は長子を通じて維持される。
- (2) エジプト人は、死後の命に強いこだわりを持っていた。
- (3) 長子の中に自分の命が生き続けているという認識があった。
- (4) パロの長子は、次に神の地位を継承する器である。
- (5) すべての初子が死ぬ。
 - ①パロの初子
 - ②女奴隷の初子
 - ③家畜の初子
- (6) エジプト全土に大きな叫びが起こる。

3. エジプト人とイスラエル人の区別

- (1) イスラエル人に対しては、犬もうなりはしない。
 - ①真夜中に物音がすると、犬はうなり声を上げるものである。
 - ②イスラエルの民は、なんの妨げもなくエジプトを出るようになる。

4. パロの家臣たちの懇願

- (1) 彼らは、イスラエル人がエジプトを出てくれるように懇願する。
- (2) パロの支配権がなくなる。
- (3) モーセが優位に立つ。
- (4) その後、イスラエル人はエジプトを出て行く。

5. モーセはパロの前を立ち去る。

III. 9つの災害のまとめ(9～10節)

1. 【主】はモーセに語っておられた(過去完了)。

- (1) パロはあなたがたの言うことを聞き入れないだろう。
- (2) 人間の責任と、神の主権の両方がかかわっている。

2. 結果

- (1) モーセは、神に従うことに伴う犠牲を学んだ。
- (2) 【主】はエジプトの地で数々の奇跡を行われた。
 - ①「モフエツト」 不思議、奇跡、しるし
 - ②エジプト人もイスラエル人も、【主】のような方は他にいないことを学んだ。

結論：このメッセージは、人生そのものを考えさせるものである。

1. 「偶像礼拝」の愚かさについて

(1) 第十の災いで裁かれる神

- ⑦ Hathor ハトホル (クロミス-スズメダイの一種-の守り神。誕生に立ち会う女神)
- ⑳ Isis イシス (農業の女神。誕生と再生の女神でもある)
- ㉑ Min ミン (誕生と再生の神)

(2) エジプトの偶像

- ①おおよそ80あった(考古学が十分に発達していない)
- ②働きは重複しており、まだ未解明の部分が多い。
- ③すべての偶像がなんらかの被害を受けている。
- ④共通項は、動物や自然現象がやがて人間の形を取ったということ。
 - * 動物は、その神の具体的なイメージである。
 - * 「いのち」をもたらす神々がことごとく打たれた。
 - * 【主】だけが「いのち」をもたらすお方である。

(3) パロの神性は、疑わしいものであることが暴かれた。

(4) 祭司の権威も、疑わしいものであることが暴かれた。

2. 神がなさる区別について

(1) 第四の災い 8：23

(2) 第五の災い 9：6

(3) 第七の災い 9：26

(4) 第九の災い 10：23

(5) Iテサ5：4～5 再臨(携挙)への備えのベースは、「区別」である。

- ①クリスチャンは光の中にいる。それゆえ、目を覚まして、慎み深くする。

3. 賜物について

(1) 怒りに燃えて出て行くモーセ。主の命令を為し終えた姿。

(2) 賜物の行使による成長

- ①「口べた」なモーセ
- ②偉大な人として尊敬されるモーセ
- ③みことばへの確信と、使命の実行

【出エジ15】出エジプト記12章1節～28節

「最初の過越の祭り」

1. 文脈の確認

- (1) エジプトに【主】からの10の災いが下る。
- (2) $3 \times 3 + 1 = 10$ という形式になっている。
- (3) フィナーレは、エジプトの長子の死である。
- (4) イスラエル人はその裁きを免れる。
- (5) 「過越の祭り」という言葉
 - ①ペサハ(ヘブル語)
 - ②パスカ(ギリシア語)
 - ③旧約聖書でも、新約聖書でも、この祭りへの言及が最も多い。
- (6) 「過越の祭り」の3つの意味
 - ①祭りの全体を指す場合
 - ②過越の子羊を指す場合
 - ③過越の子羊の準備を指す場合

* マタ 26:17、19、マコ 14:12、14～16、ルカ 22:8、13
- (7) ユダヤ人たちは、3千年にわたって過越の祭りを祝ってきた。
 - ①今年は、3月30日(火)から(29日の日没から)始まる。
 - ②8日間(過越の祭りが1日、種なしパンの祭りが7日)
 - ③過越の祭りの起源が、出エジプト記12章である。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 過越の祭り(1～14節)
- (2) 種なしパンの祭り(15～20節)
- (3) 【主】の命令を実行するイスラエルの民(21～28節)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 過越の祭りの象徴的意味
- (2) 血の象徴的意味
- (3) ヒソプの象徴的意味
- (4) 礼拝の象徴的意味

このメッセージは、メシアの業について学ぼうとするものである。

I. 過越の祭り(1～14節)

1. 年の最初の月

- (1) アビブの月
- (2) ニサンの月(バビロン捕囚以降、バビロンの呼び名になる)
 - ①ネヘ2:1
 - ②エス3:7
- (3) 国の始まりの月なので、これが最初の月となる。

2. ニサンの月の10日

- (1) 羊を用意する。
- (2) 家族ごとに羊1頭。人数が少ない場合は、隣の人と分かち合う。
- (3) 羊の条件
 - ①傷がない。
 - ②1歳の雄である。
 - ③小羊かやぎのうちから取る。

3. ニサンの月の14日

- (1) 10日から14日まで、それをよく見守る。
 - ①ガードする(守る)。
 - ②吟味する。
- (2) 夕暮れにほふる
 - ①「夕暮れ」を直訳すると、「2つの夕暮れの間」となる。
 - ②14日の午後3時から日没までの間
 - ③日没から暗くなるまでの間(15日になっている)
 - ④両方の解釈が可能である。
- (3) その血を取る。
 - ①2本の門柱と、かもいに、それをつける。
 - ②象徴的な意味
 - *人間の全存在
 - 「これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい」(口語訳申6:9)
 - *十字架の形
 - ③これを行うのは、最初の過越の祭りのみである。

4. ニサンの月の15日

- (1) その夜、その肉を食べる。
- (2) 火に焼く(ロースト)
 - ①生のままはいけない。
 - ②水で煮てもいけない。
 - ③頭も足も内臓も全部いっしょに火で焼かなければならない。
- (3) それを朝まで残してはならない。
 - ①残ったものは、火で焼く。
 - ②この祭りは特別なものなので、翌日に同じものを食してはならない。
- (4) 食べる時の姿勢(1度限りの命令)
 - ①腰の帯を引き締め(旅立ちの格好)
 - ②足に靴を履き
 - ③手に杖を持ち
 - ④急いで食べる
 - ⑤【主】が「旅立て」と言われたなら、すぐに従えるように。
 - ⑥約束の地では、ユダヤ人たちは横になって食した。
- (5) 【主】はその夜、エジプトの地を巡る。
 - ①エジプトの地のすべての初子を打つ。
 - *人の初子
 - *家畜の初子
 - ②エジプト人のすべての神々に裁きを下す。
- (6) 【主】はイスラエル人の家々を通り越す。

「あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない」(13節)

 - ①過越の祭りという言葉の起源
 - ②【主】は、血を見て過ぎ越される。

5. 血の効用

- (1) 1～3の裁きは、エジプト人にもイスラエル人にも下った。
- (2) 4～9の裁きは、エジプト人にだけ下り、イスラエル人は区別された。
- (3) 第10番目の裁きは、両者に下る可能性があった。
- (4) 神の命令に従って血を塗ったので、イスラエル人は裁きを免れた。

6. 記念すべき日

(1) 過越の祭りは代々守るべき祭りとなった(14節)。

「この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこれを【主】への祭りとして祝い、代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない」

(2) 今でもユダヤ人たちは、この命令を実行している。

II. 種なしパンの祭り(15～20節)

1. 7日間の祭り

(1) 過越の祭りは、1日だけの祭り

(2) 種なしパンの祭りは、7日間の祭り

(3) 新約時代には、8日間をまとめて「種なしパンの祝い」と呼ぶようになった。

①ルカ22:1

「さて、過越の祭りといわれる、種なしパンの祝いが近づいていた」

2. 種を入れないパンを食べる。

(1) 7日間食べる(過越の祭りを入れると、8日間それを食べる)。

(2) 急いでいたので、パン生地を発酵させる余裕がなかった。

①これは旅のための食糧となった。

②出12:34、39

(3) それに違反するなら、殺される。

(4) 第1日と第7日に、聖なる会合を開く。

①この期間の労働は禁止された。

②調理だけは許された。

3. 永遠のおきて

(1) 出エジプトの記念として、種なしパンの祭りを守る。

III. 【主】の命令を実行するイスラエルの民(21～28節)

1. 命令の伝達

(1) 【主】 → モーセ → 長老たち → 家長 → 家族

2. 命令の内容

(1) 家族ごとに羊を取り、過越のいけにえとしてほふる。

- (2) その血をかもいと2本の門柱につける。
- (3) 朝まで戸口から外に出てはならない。
- (4) 【主】は血をご覧になり、その戸口を過ぎ越される。
 - ①滅ぼす者がその家に入ってくることはない。
- (5) この儀式は、永遠に守るべき祭りとなる。
 - ①約束の地に入った時にそれを実行する。
 - ②子孫にその意味を伝える。
- (6) イスラエルの民は、【主】を礼拝した。つまり、同意した。

結論：このメッセージは、メシアの業について学ぼうとするものである。

1. 過越の祭りの象徴的意味

- (1) 政治的独立を祝うものではない。
- (2) 死からの解放を祝うものである。
- (3) エジプトの地のすべての初子が死んだ。
 - ①イスラエル人の初子も死ぬ可能性があった。
 - ②過越の子羊の命が、イスラエル人の初子の命の身代わりとなった。
- (4) 過越の子羊はメシアの型である。
 - ①ヨハ1：29
 - ②マタ20：28
 - ③マコ10：45

2. 血の象徴的意味

- (1) 罪のゆえに死が人類を支配するようになった。

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です」(Iコリ15：56)
- (2) 罪は裁かねばならない。
- (3) 血は命を象徴する。

「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である」(レビ17：11)

「それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです」(ヘブ9：22)

3. ヒソプの象徴的意味 (22 節)

(1) 血は、【主】がそれを見て、過ぎ越すための「しるし」以上のものである。

(2) ヒソプは、罪を清めるため、罪を覆うために用いられる植物である。

①レビ 14：4～6、49～52

②民 19：16、18

③詩 51：7

「ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう」

(3) 旧約時代の犠牲の限界

①へブ 9：9

「この幕屋はその当時のための比喻です。それに従って、ささげ物といけにえとがささげられますが、それらは礼拝する者の良心を完全にすることはできません」

4. 礼拝の象徴的意味 (27 節)

(1) 【主】の約束を信じたということ

(2) 出エジプト体験と私たちの霊的体験

①約束の地と永遠の御国の対比

②過越の子羊とイエスの対比

③イスラエルの民の信仰と私たちの信仰の対比

④イスラエルの民が体験した死への勝利と私たちの体験の対比

【出エジ16】出エジプト記12章29節～42節

「第十の災い」

1. 文脈の確認

- (1) 第十の災い(フィナーレ)は、エジプトの長子の死である。
- (2) 前回は、最初の過越の祭りが祝われた。
- (3) また、7日間の種なしパンの祭りが設定された。
- (4) 過越の祭りの象徴的意味
 - ①政治的独立よりも、死からの解放を祝うものである。
 - ②過越の子羊はメシアの型である。
- (5) ユダヤ人たちは、今日に至るまで過越の祭りを祝ってきた。
 - ①今年は、3月30日(火)から(29日の日没から)始まる。
 - ②8日間(過越の祭りが1日、種なしパンの祭りが7日)
 - ③過越の祭りの起源が、出エジプト記12章である。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 第十の災い(29～36節)
- (2) エジプトからの脱出(37～42節)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 偶像礼拝の愚かさ
- (2) 再臨
- (3) 計画
- (4) 神の時

このメッセージは、神の約束の真実さを学ぼうとするものである。

I. 第十の災い(29～36節)

1. 真夜中になって

- (1) 眠りが深くなった時
- (2) 最も平安が必要な時

2. エジプト人たちは、体験的に神を裁きの神として知った。

- (1) すべての初子が打たれた。
 - ①男子の初子のこと
 - ②人間の初子から家畜の初子に至るまで
- (2) パロの初子から、捕虜の初子に至るまで
 - ①神にとっては、地位や身分は関係ない。
 - ②エジプト人のすべての家がなんらかの被害を被った。
 - ③エジプト中に激しい泣き叫びが起こった。

3. パロの反応

- (1) 完全降伏
- (2) 今回は妥協なしに、モーセの要求に応じた。
- (3) パロはモーセに命令した。
 - ①私の民の中から出て行け。
 - ②行って、【主】に仕えよ。
 - ③家畜も連れて出て行け。
 - ④私のためにも祝福を祈れ。

4. エジプト人の反応

- (1) 彼らは、イスラエルの民をせき立てた。
- (2) 強制的に、エジプトから追い出した。
- (3) その理由は、自分たちも殺されると思ったからである。

5. イスラエルの民の行動

- (1) 練り粉を、パン種を入れないうままで持ち運んだ。
 - ①時間がなかった。急いでいた。
 - ②エジプトを出てからの数日間は、種なしパンを食べた。
 - ③過越の祭りに続く種なしパンの祭りは、それを記念するための祭りである。
- (2) エジプトから財を求めた。
 - ①銀の飾り
 - ②金の飾り
 - ③着物
- (3) 借りたのではない。
 - ①返却の必要はない。
 - ②400年にわたる労働の対価である。
 - ③幕屋建設のための資材となる。

(4) エジプト人はそれに快く応じた。

①【主】の働きがあった。

②エジプト人は、イスラエル人がエジプトを出ることを願った。

③これは、創15:14の成就である。

「しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる」

II. エジプトからの脱出 (37～42節)

1. ラメセスからスコテに向かって

2. 人数

(1) 徒歩の壮年の男子は約60万人。

(2) 20歳以上の男子

(3) 妻が1人、子ども2人いるとすると、180万人がプラスされる。

(4) 控えめに見て、約200万人のイスラエル人がエジプトを出た。

3. エジプトを出たその他の人と家畜

(1) 多くの入り混じって来た外国人

①セム系人種であるが、イスラエル人ではない。

②エジプトで捕虜か奴隷になっていた人々。

(2) 非常に多くの家畜

4. エジプト寄留の期間

(1) ちょうど430年

①ちょうどその日に、エジプトを出た。

②誰かが、記録し、覚え、数えていた。

③神はご自身の約束を覚えておられる。

④まだ祈りが聞かれていなくても、神は忘れておられない。

5. この夜、【主】は寝ずの番をされた。

(1) 【主】の守りがあったということ

(2) イスラエル人は、代々にわたり、【主】のために寝ずの番をする。

①過越の祭りを守ること

結論：このメッセージは、神の約束の真実さを学ぼうとするものである。

1. 偶像礼拝の愚かさ

- ⑦ Hathor ハトホル (クロミス、スズメダイの一種の守り神。誕生に立ち会う女神)
- ⑳ Isis イシス (農業の女神。誕生と再生の女神でもある)
- ㉑ Min ミン (誕生と再生の神)

2. 主の再臨について

- (1) 私たちは、主をどのようなお方として知るようになるのだろうか。
 - * 祝福を与えるお方か、罪を裁かれるお方か
- (2) 主イエスの再臨は真夜中ごろにやって来る。
- (3) Iテサ5：1～6
- (4) 過越の祭りは、イスラエルの歴史のピークの出来事である。
- (5) しかし、それ以上のピークがやって来る。
 - ①エレ16：14～15、23：7～8
 - ②終末の回復
 - ③千年王国の成就

3. 計画について

- (1) 神の約束は、私たちに計画を立てるように迫る。
- (2) リーダーとしての自己認識
- (3) 明確な目標
- (4) 組織化
 - * 組織化された200万人の民(完璧ではないが)
 - * 「【主】の全集団」(新改訳)
 - * 「主の全軍」(口語訳)
 - * 「主の部隊は全軍」(新共同訳)

4. 神の時について

- (1) なぜ430年もかかったのか。
 - ①エモリ人(カナン人)の咎が満ちるための期間
 - ②モーセというリーダーが登場する必要があった。
- (2) まだ起こっていなくても、それは「否」ではない。
 - (例話) ムーア一家との交わりから学ぶ教訓
 - ①神を信じて前進すれば、驚くべき体験をするようになる。
 - ②先に行けば行くほど、神の祝福が増えてくる。

【出エジ17】 出エジプト記12章43節～13章16節

「初子の贖い」

1. 文脈の確認

- (1) アブラハム契約(創12章)から人類救済の新しい計画が始まっている。
- (2) アブラハム、イサク、ヤコブの子孫は、その計画を推進する器となる。
- (3) 神はヤコブの一家をエジプトに導き、そこで隔離しながら一大民族に育てた。
- (4) イスラエルの民は、430年後にエジプトを脱出した。
- (5) その際、子羊をほふり、過越の食事をした。
 - ①この時から過越の祭りの習慣が始まった。
 - ②過越の子羊はメシアの型である。
- (6) この箇所は、エジプトを出た直前か直後に、イスラエルの民に語られたもの。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 過越の祭りに関する付加規定(12章43節～51節)
- (2) 初子の聖別(13章1節～16節)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) アブラハム契約の重要性
- (2) 出エジプト事件の詩的まとめ
- (3) 健全な自己認識

このメッセージは、出エジプト事件と私たちの生活を結び付けるためのものである。

I. 過越の祭りに関する付加規定(12章43節～51節)

1. 付加規定が必要な理由

- (1) 12:38「多くの入り混じってきた外国人」
- (2) カナンの地に定住した際の状況

2. 付加規定の内容

- (1) 外国人(非イスラエル人)
 - ①過越のいえにえを食べてはならない。
- (2) 金で買われた奴隷

- ①食べることができる。
- ②割礼を施すという条件付き。
- (3) 居留者(短期間の滞在者)と雇い人(給与労働者)
 - ①食べてはならない。
- (4) 家の中で食べる。
 - ①外に持ち出してはならない。
- (5) 骨を折ってはならない。
 - ①詩34:20
「主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない」
 - ②ヨハ19:32～36
「この事が起こったのは、『彼の骨は一つも砕かれない』という聖書のことばが成就するためであった(36節)」

3. さらなる付加規定

- (1) 在留異国人
 - ①カナンの地に定住してからのこと
 - ②家の男子がみな割礼を受けるなら、食べてもよい。
 - ③信仰をもって割礼を受けるなら、イスラエルの共同体に入ることができた。
 - ④無割礼の者は食べてはならない。

4. 付加規定のまとめ

- (1) 過越のいけにえを食べてもよい人
 - ①イスラエル人
 - ②金で買われた奴隷
 - ③在留異国人
- (2) 条件は割礼を受けていること
- (3) 聖餐式は、心に割礼を受けている者がそれに与る。そうでないなら無意味。
- (4) イスラエルの民の従順

5. エジプト脱出

- (1) 「ちょうどその日に、【主】はイスラエル人を、集団ごとに、エジプトの国から連れ出された」(新改訳)
- (2) 「その軍団に従って」(口語訳)
- (3) 「部隊ごとに」(新共同訳)
- (4) 組織化された、秩序ある脱出であった。

II. 初子の聖別 (13章1節～16節)

1. 神の所有権 (1～2節)

「イスラエル人の間で、最初に生まれる初子はすべて、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それはわたしのものである」(2節)

(1) イスラエル人の間でのみ行われるべきこと

(2) 最初に生まれる初子はすべて

- ①男子のみ
- ②人の初子
- ③家畜の初子

(3) 聖別

①主のために選り分ける、俗的世界から、聖なる世界に移し替える。

2. 祭りの再確認 (3～10節)

(1) この日を覚えていなさい。

- ①アビブ(ニサン)の月の15日
- ②過越の食事を食した日
- ③エジプトを出た日

(2) カナンの地に入った時に守るべき儀式

- ①種なしパンの祭り 7日間
- ②この祭りの期間、イスラエル人の周りにパン種があってはならない。

(3) 子どもたちに、祭りの意味を教える。

(4) このことを記念するために、手と額の上に、【主】の教えを置く。

「これをあなたの手の上のしるしとし、またあなたの額の上の記念としなさい。それは【主】のおしえがあなたの口にあるためであり、【主】が力強い御手で、あなたをエジプトから連れ出されたからである」(9節)

- ①ユダヤ人はこの箇所を字義通りに解釈している。
- ②テフィリン(ヘブル語)、フィラクテリオン(ギリシア語)
- ③額と左手に「聖句の入った小箱」を付ける。
- ④マタ23:5 イエスはこの習慣を否定していない。偽善を否定している。
- ⑤中に入っている聖句(この順番に記されている)

* 申命記11:13～22

* 申命記6:4～9

* 出エジプト記13:11～16

* 出エジプト記13:1～10

3. 初子の聖別(11～16節)

(1) 家畜の初子は、ほふる。

(2) 人間の初子は、贖う。

①民18:16

「初子は、生後一か月を経た後、銀五シケル、つまり一シケル当たり二十ゲラの聖所シケルの贖い金を支払う」(新共同訳)

(3) けがれた家畜の場合

①ろばがその代表(馬、らくだなどもいる)

②羊で贖う。

③そうでないなら、首を折る。

(4) 種々のケースが考えられる。

①最初の生まれた女子の場合は、贖う必要はない。

②女子の次に生まれた長男の場合も、贖う必要はない。

③再婚した妻に子がいる場合、彼女がその結婚で産む初子は、贖う必要がない。

④数人の妻と結婚した男の場合、すべての妻の初子を贖う必要がある。

⑤女と男の双子が誕生した場合、贖う必要はない。

⑥イスラエル人にのみ適用される規定である。

(5) 子孫に伝えるべきメッセージ

①出エジプトの際、【主】はエジプトの初子を人から家畜に至るまで打たれた。

②イスラエル人は、初子をみな贖う。

③これを手の上のしるしとし、額の上の記章とする。

結論: このメッセージは、出エジプト事件と私たちを結びつけるものである。

1. アブラハム契約の重要性

(1) 過越の食事をするための資格は、アブラハム契約の条項に合致していること。

(2) 創17:9～14

「次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中のすべての男子は割礼を受けなさい」

①割礼は契約のしるしである。

②生まれて8日目に男子は割礼を受ける。

③家で生まれたしもべも、金で買い取った者も

④割礼を受けない者は、民から断ち切られる。

(3) 出エジプトも、その後のドラマも、アブラハム契約を土台としている。

2. 出エジプト事件の詩的まとめ

(1) 詩 105：26～38 を味わう。

3. 健全な自己認識

(1) 神は私たちの上に所有権を主張される。

「イスラエル人の中で、最初に生まれる初子はすべて、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それはわたしのものである」(2節)

(2) 出エジプトの目的は、2つある。

① 奴隷の家からの解放

② 【主】の民の形成

(3) 新約聖書における出エジプトにも2つの目的がある。

① 罪の束縛と死の恐怖からの解放

② 【主】の民の形成

(4) 使 20：28

「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです」

(5) I コリ 6：20

「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい」

(6) ロマ 12：1

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」

【出エジ18】出エジプト記13章17節～14章14節

「エジプト脱出」

1. 文脈の確認

- (1) イスラエルの民は、430年後にエジプトを脱出した。
- (2) 出エジプトの目的は2つある。
 - ① 奴隷状態から自由の民となる。
 - ② 【主】を礼拝する民を作る。
- (3) エジプト脱出の記録は、13：1～15：21までである。
- (4) 先ず、初子の聖別の命令が与えられた(13：1～16)
- (5) きょうの箇所から、紅海の出来事の記録が始まる。
 - ① イスラエルは窮地に陥る。
 - ② 神に全面的に信頼するか、死ぬかのいずれかしかない。
 - ③ イスラエルの歴史に残る大事件が起こる。

2. アウトライン

- (1) ルートの確定(13：17～22)
- (2) エジプト軍の追跡(14：1～9)
- (3) 民の動揺(14：10～12)
- (4) モーセの信仰(14：13～14)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) ヨセフの遺骸を持ち運ぶ意味
- (2) 「パロの心をかたくなにする」の意味
- (3) シャカイナグローリーの役割

このメッセージは、出エジプト事件と私たちの生活を結び付けるためのものである。

I. ルートの確定(13章17節～22節)

1. パロは、イスラエルの民がエジプトから出ることを許可した。
 - (1) エジプト中の初子が打たれたため
 - (2) 急いで民を追い出した。

2. カナンの地に至るルートの確定

(1) 最短コースは、ペリシテ人の国を北上すること。

- ①「近道」
- ②10日もあればカナンの地に到着する。
- ③そこにはエジプトの砦が置かれている。
- ④ガザ、アシュケロン、アシュドデ、エクロン、ガテ

(2) 神は最短コースではなく、より安全な道に彼らを導かれた。

- ①「民が戦いを見て、心が変わり、エジプトに引き返すといけない」
- ②イスラエルの民は、軍隊の体裁を取ってエジプトを出た(13:18、12:51)。
- ③しかし、それは見かけだけのこと。
- ④神が先頭に立って戦ってくださることを体験する必要があった。

*それが紅海の出来事

*それ以降、戦いの準備が整い、民は戦闘体験を重ねて行った。

⑤パウロの体験(IIコリ1:8~10)

*パウロにとっての紅海の出来事

*神により頼むか、死か

*信仰が体験となり、体験が新たな信仰を生む。

(3) 葦の海に沿う荒野の道

- ①紅海は北に向かうとスエズ湾とアカバ湾に分かれる。
- ②葦の海は、スエズ湾の北端にあったと思われる。
- ③「ヤム・スフ」(葦の海) Reed Sea → Red Sea

3. モーセはヨセフの遺骸を携えて来た。

(1) 創50:24~25

(2) モーセはヨセフとの約束を実行した。

4. 雲の柱、火の柱

(1) とともに、シャカイナグローリーを指す。

①雲の柱は、案内役であり、日陰ともなった。

②夜は、民を照らすために火の柱となった。

(2) 【主】が民ともにいて、その前を進まれた。

II. エジプト軍の追跡(14:1~9)

1. 地名は今では明確には分からない。

(1) モーセは確実な知識を持っていた。

2. 旅程

(1) イスラエルの民は、スコテから3日の旅を終えてエタムに宿営した(3:20)。

(2) エタムは、荒野の端にある。つまり、その先は荒野(シナイ半島)である。

①シュルの荒野

②エタムの荒野は、シュルの荒野の一部である。

(3) 2つの選択肢

①【主】にいけにえを捧げ、エジプトに帰る。これはあり得ない。

②そのまま東に進み、シナイ半島を通過してカナンの地に向かう。

*エジプトの戦車では追いかけにくい地に入る。

(4) 【主】は第3の道を示された。

「イスラエル人に、引き返すように言え。そしてミグドルと海の間にあるピ・ハヒロテに面したバアル・ツェフォンの手前で宿営せよ。あなたがたは、それに向かって海辺に宿営しなければならない」

①「引き返すように言え」(turn back)

②むしろ、「道をそれるように言え」(turn away, turn off)と訳すべき。

③東に向かうのではなく、南に向かう。

④海を左手に見ながら南下する。カナンから遠ざかる。

⑤民の信仰が試されている。神の計画は見えてこない。

⑥宿営地のバアル・ツェフォンは、海と山に挟まれた地である。

(5) 【主】の計画

①パロをおびき出すため。

②パロは、イスラエル人は道に迷ったと思う。

③パロの心は頑なになり、後を追って来るだろう。

④神の民イスラエルを苦しめたエジプトに神の裁きが下る。

*これが出エジプトの出来事のクライマックス。

*神の性質と力の啓示

*新約聖書においては、神の子の受肉がこれに相当する出来事である。

⑤エジプトは、【主】こそ神であることを知るようになる。

⑥イスラエルの民は、【主】が自分たちのために戦われることを知るようになる。

⑦イスラエルの民は、その通りにした。

3. エジプト軍の追跡

(1) 考えが変わる

- ①パロと家臣たちは、ともに考えを変えた。
- ②真の悔い改めに至っていないから。
- ③経済的損失を考えた。
- (2) 当時、世界最強のエジプト軍が追いかけて来た。
 - ①軽量の戦車、馬3頭立て、2人乗り。
 - ②戦車600を先頭に
 - ③その後に、多数の戦車が続いた。
- (3) パロとイスラエルの民の対比
 - ①パロの心は頑なになっている。イスラエル人を追跡している。
 - ②「イスラエルの人々は、意気揚々と出て行った」(新共同訳)
 - * エジプト人が好意を示した。
 - * 財を得た。
 - * 【主】がともにおられる。
- (4) そしてエジプト軍は、ついに追いついた。
 - ①海辺に宿営しているので、逃げ場がない。
 - ②神の導きでここに宿営するようになった。

III. 民の動揺 (14:10～12)

- 1. 40年間繰り返す「つぶやき」の最初のもの
 - (1) 「信仰の冒険よりは、奴隷の安全が欲しい」

2. 2種類の目と2種類の叫び

「パロは近づいていた。それで、イスラエル人が目を上げて見ると、なんと、エジプト人が彼らのあとに迫っているではないか。イスラエル人は非常に恐れて、【主】に向かって叫んだ」

(1) 信仰の目と肉の目

- ①彼らは、肉の目を見た。
- ②非常に恐れた。
 - * 自分たちには戦争の経験がない。
 - * 敵は世界で最強の軍隊である。
 - * 奴隷根性はその心を支配している。
 - * ついこの間まで、敵は自分たちの主人であった。

(2) 信仰の叫びと不信仰の叫び

- ①助けを求めたのではなく、不平を言った。

3. 不平の内容

(1) これは、モーセへの不平である。

「エジプトには墓がないので、あなたは私たちを連れて来て、この荒野で、死なせるのですか。私たちをエジプトから連れ出したりして、いったい何ということをお私たちにしてくれたのです」

(2) ユダヤ的皮肉である。

(例話) 聖地旅行「空腹とはどういうことかを教えるために、ここまで誘ったのか」

①エジプト人は、墓にこだわった。

*ピラミッドの国

*イスラエル人は多いので、十分な墓の数がない。

*荒野で死ねば、埋葬の心配はない。

(3) 「信仰の冒険よりは、奴隷の安全が欲しい」

①荒野で死ぬよりは、エジプトで奴隷でいた方がよかった。

IV. モーセの信仰 (14:13～14)

1. 10の災いから教訓を学んでいた。

(1) 【主】の計画は分からなかった。

(2) しかし、敗北するのは自分たちではなく、敵であることを確信していた。

2. 旧約聖書の中で最も感動的な信仰告白のひとつである。

(1) 恐れてはいけない。

①パロとその軍勢を恐れるな。

②恐るべき方を恐れよ。

(2) しっかり立って、

①逃げ出そうとするな(物理的に不可能ではあるが)。

②【主】が導かれた場所に留まれ。

(3) きょう、あなたがたのために行われる【主】の救いを見なさい。

①解決はすみやかに来る。「きょう」

②解決は、【主】から来る。「【主】の救い」

(4) あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。

①今見ているエジプト人はいなくなる。

②彼らが見るのは、海に浮かぶエジプトの死体である(モーセには分からない)。

(5) 【主】があなたがたのために戦われる。

①【主】は、風と海の波を軍勢として動員される。

- ②自分たちに戦闘の体験や意欲がなくても、大丈夫である。
- (6) あなたがたは黙っていなければならない。
 - ①恐れて叫び出すな。
 - ②戦いのための「ときの声」を上げるな。

結論：このメッセージは、出エジプト事件と私たちを結びつけるものである。

1. ヨセフの遺体を持ち運ぶ意味

(1) ヨセフの信仰

- ①アブラハム契約を信じた。
- ②また、死後の命を信じた。
- (2) 出エジプトとカナン征服は、アブラハム契約という文脈の中で起こっている。
 - ①ヨセフの骨は、40年後にカナンの地で葬られた。
 - ②ヨシ24：32

「イスラエル人がエジプトから携え上ったヨセフの骨は、シェケムの地に、すなわちヤコブが百ヶシタでシェケムの父ハモルの子らから買い取った野の一角に、葬った。そのとき、そこはヨセフ族の相続地となっていた」

- (3) 私たちには、復活の主がおられる。

2. 「パロの心をかたくなにする」(4節)の意味

(1) 14：4、8

- ①ある人にとっては、抵抗を感じる表現である。
- (2) 善良な人間が罪を犯すように仕向けられたのではない。
 - ①神はあらかじめパロが頑なになることを知っておられた。
 - ②パロは自らその心を頑なにした。
 - ③パロは明白な警告を受けてからも、頑なな状態にとどまった。

(3) 神の主権と人間の選びというテーマ

- ①人間は自らの行動に責任がある。
- ②神は、人間の不信仰や反逆を、ご自身の計画のためにお用いになる。

3. シャカイナグローリーの役割

(1) モーセを出エジプトのリーダーとして召した。

(2) イスラエルの民を導いた。

- ①その状態が、40年間続く。
- ②民33：49で、雲の柱と火の柱は消えたと思われる。

- ③ヨルダン川を渡る時は、契約の箱が先頭を進んだ（ヨシ3：6）。
- (3) シャカイナグローリーこそ、私たちの力であり、ゴールである。
 - ①マタ 28：18～20
 - ②聖書が書かれている目的は、神の栄光のためである。

【出エジ19】出エジプト記14章15節～15章21節

「紅海を渡る」

1. 文脈の確認

- (1) イスラエルの民は、430年後にエジプトを脱出した。
- (2) エジプト脱出の記録は、13：1～15：21までである。
- (3) 紅海の出来事の記録はすでに始まっている。
 - ①イスラエルは窮地に陥る。
 - ②神に全面的に信頼するか、死ぬかのいずれかしかない。
 - ③イスラエルの民は動揺した。
 - ④モーセは、旧約聖書の中で最高の信仰告白をした(13～14節)。

2. アウトライン

- (1) 紅海を渡る(14：15～31)
- (2) モーセの歌(15：1～18)
- (3) ミリアムの歌(15：19～21)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) シャカイナグローリーの働きについて
- (2) 世界観について
- (3) 歴史の分水嶺について

このメッセージは、私たちの世界観を確立するためのものである。

I. 紅海を渡る(14章15節～31節)

1. まとめが14：29～31に書かれている。
 - (1) イスラエル人は海の真ん中のかわいた地を歩いた。
 - (2) 【主】はその日イスラエルをエジプトの手から救われた。
 - (3) 民は【主】を恐れ、【主】とそのしもべモーセを信じた。

2. イスラエル人は海の真ん中のかわいた地を歩いた。
 - (1) 「なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか」
 - ①書かれていないが、モーセは【主】に祈っていた。

- ②その祈りは、叫ぶような祈りであった。
- (2) 「イスラエル人に前進するように言え」(新改訳)
「イスラエルの人々に命じて出発させなさい」(新共同訳)
- ①祈るに時があり、行動するに時がある。
②背後から敵が迫って来るので、海に向かって前進するしかない。
③海はまだ分かれていない状態で、前進し始める。
*分かれてから歩き始めるなら、それは確認である。
*分かれる前に歩き始めるなら、それは信仰である。
- (3) 「あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に差し伸ばし、海を分けて、」
- ①エジプトに災いを下すために用いられた杖が用いられる。
②杖で海を打つわけではない。
③海の上に杖を指し伸ばすだけである。
- (4) 「わたしの栄光を現そう」(17節)
- ①栄光は「カボッド」という言葉。重みがある、現実そのもの、などの意味。
②対比する相手は、パロとその全軍勢、戦車と騎兵。
③エジプトはその時代の文明の最高峰であり、その軍事力は最強であった。
- (5) 雲の柱(シャカイナグローリー)の働き
- ①神の使いは、雲の柱の中にいる。受肉前のメシアである。
②イスラエルの陣営の前を進んでいた雲の柱は、うしろに移動した。
③エジプトの陣営は闇に閉じ込められたが、イスラエルの陣営には光があった。
- (6) モーセが手を海の上に指し伸ばすと、強い東風が吹いてきた。
- ①浅瀬の水なら、強風でその姿を変えることはあるが、陸地にはならない。
②水は左右に壁となった。
③神は自然現象を用いて、奇跡を行われる。
④イスラエル人は海の真ん中のかわいた地を進んで行った。
- (7) エジプト人は、自分たちもそこを進めると考えた。
- ①神のことばを受けていないなら、その約束は自分のものではない。
- (8) 【主】の御業
- ①「朝の見張りのころ」夜明け前の時間、「暁の更に」(口語訳)
②【主】は火と雲の柱のうちからエジプトの陣営を見おろし、攪乱された。
③戦車の車輪に問題が生じた。
④エジプト人は、ようやく何が起こっているかに気づいた。
「【主】が彼らのために、エジプトと戦っておられるのだから」
⑤モーセが手を海の上に差し伸べた時、海がもとの状態に戻った。
⑥パロの全軍勢は溺死した。

2. 【主】はその日イスラエルをエジプトの手から救われた。

(1) この出来事は、奴隷からの解放物語のクライマックスとなった。

①それ以降のすべての解放物語の原型となった。

(2) この救いは、アブラハム契約の約束が成就する第一歩となった。

①イスラエルの民への祝福

②諸国民への祝福

③イスラエルを祝福する者は祝福を受け、呪う者は呪いを受ける。

④イスラエルの赤子を溺死させたエジプトは、紅海で溺死させられた。

3. 民は【主】を恐れ、【主】とそのしもべモーセを信じた。

(1) 【主】の奇跡を見た。

(2) 3つの結果

①【主】への恐れが生じた。

②【主】を信じた。

③【主】のしもべモーセを信じた。

(3) 彼らの信仰は短命であった。

①15：24 水についての文句

②16：3 食べ物についての不平

II. モーセの歌 (15：1～18)

1. 特徴

(1) 聖書に記録されている最初の詩である。

①ヘブルの詩の形式は、対句法である。

②散文では表現できない心の動きと感動を表現する。

(2) 3つのスタンザ(連)からなる。

2. 最初のスタンザ(1～5節)

(1) テーマは、神の性質である。

①「その御名は【主】」(3節)

②ここは、「ヤハウエ」と訳すべきところである。

(2) 「ヤハウエ」は契約の神の御名である。

①「私の父の神」

②「この方こそ、わが神」

③彼らは、神を体験した。

3. 第2のスタンザ(6～12節)

(1) テーマは、神の力である。

- ①「右の手」とは、剣を持つ手である。
- ②「鼻の息」とは、東風である。

(2) 偶像の神々との比較

- ①「【主】よ。神々のうち、だれかあなたのような方がいるでしょうか」
- ②エジプトの敗北は、エジプトの偶像の敗北である。

4. 第3のスタンザ(13～18節)

(1) テーマは、【主】にある希望である。

- ①「恵み」(新改訳)、「慈しみ」(新共同訳)とは、「ヘセッド」。
- ②契約に基づく「恵み」である。

(2) 近隣諸国に、恐れが生じた。

- ①ペリシテ
- ②エドム
- ③モアブ
- ④カナン
- ⑤ヨシ2：9～11 エリコのラハブの告白

(3)「あなたは彼らを連れて行き、あなたご自身の山に植えられる」(17節)

- ①【主】が彼らを約束の地に導かれる。
- ②彼らは、その地で繁栄を経験するようになる。

III. ミリアムの歌(15：19～21)

1. 歌の理由(19節)

2. 女たちの歌

(1) 古代世界では、儀式的踊りや歌は、男女別々に行った。

(2) ミリアム

- ①アロンの姉(モーセは幼いころから家を出ていた)
- ②女預言者(聖書で初めてこの言葉が登場する)
- ③タンバリンを手にとって踊る。
- ④ミリアムが女たちの賛美を導く。

結論：このメッセージは、私たちの世界観を確立するためのものである。

1. シャカイナグローリーの働きについて

(1) 4段階

- ①モーセを召した。
- ②イスラエルの民を導いた。
- ③イスラエルの民を敵から守った。
- ④エジプト軍を破った。

(2) 私たちへの教訓

- ①マタ 28：20 イスラエルとともにおられたお方が、私たちとともにおられる。
- ②そのお方の権威を認識する。
- ③その権威は、神の御心を行う時に有効なる権威である。

2. 世界観について

(1) エジプト文明とローマ文明の世界観は、ともに多神教である。

- ①自然界の観察により、多くの神々がいるとの結論を出した。
- ②歴史の出来事は、繰り返すと考えた。

(2) イスラエル人の世界観は、これとは全く異なる。

- ①神は唯一であり、自然界を超越している。
- ②その神は、目的をもって天地を創造した神である。
- ③神は、ご自身の計画に従って、ある目的に向かって歴史を導いている。

(3) イスラエル人がこのような世界観を持つようになった理由

- ①神が、歴史に介入した。
- ②自分たちは、それを体験した。
- ③紅海を渡った出来事は、その体験の最高峰である。
- ④この体験によって、ヤハウエは先祖の神から、「私の神」となった。

(4) 私たちへの教訓

- ①なぜ私は、イスラエルの神を信じるのか。
- ②なぜ私は、2000年前に十字架上で死んだというイエスを信じるのか。
- ③神が歴史に介入されたからである。
 - * 神が人となられた。
 - * イエスは呪いの死を遂げ、3日目に復活された。
 - * イエスの御名による罪の赦しが、ユダヤ人信者によって伝えられた。
- ④イエスを信じた私たちは、神が歴史に介入されたことを体験した。
 - * イスラエルの神は、「私の神」となった。

3. 歴史の分水嶺について

(1) パウロはこの出来事を、I コリ 10：1～2 に引用している。

- ①イスラエル国家の誕生
- ②信者が経験する霊的誕生の型

(2) その他の分水嶺

- ①カデシュ・バルネア事件(民13章)
- ②ヨルダン川を渡る。
- ③エリコの征服
- ④王国の誕生
- ⑤ダビデの油注ぎ
- ⑥南北分裂
- ⑦アッシリヤ捕囚
- ⑧バビロン捕囚
- ⑨捕囚からの帰還
- ⑩メシアの誕生
- ⑪メシアの拒否
- ⑫エルサレムの崩壊(紀元70年)

(3) 次の分水嶺

- ①携拳と地上再臨
- ②その前に、異邦人の時が満ちる。
- ③日本のリバイバルは、間違いなく歴史の分水嶺となる。

【出エジ 20】 出エジプト記 15章 22節～27節

「マラとエリムでの体験」

1. 文脈の確認

- (1) イスラエルの民は、紅海を渡った。
- (2) 荒野の旅が始まった。
- (3) 荒野の旅は、ご自身の民を訓練する学校でもある。
- (4) きょうの内容は分かりやすいが、それを自分に適用するのは難しい。

2. アウトライン

- (1) 最初の3日間 (15:22)
- (2) マラでの体験 (15:23～26)
- (3) エリムでの体験 (15:27)

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 舞台裏について (神の御心)
- (2) 旧約聖書の約束と新約時代のクリスチャンの関係について
- (3) この箇所適用について

このメッセージは、人生が旅であることを学ぼうとするものである。

I. 最初の3日間 (15章 22節)

1. 旅立ち

- (1) 「モーセはイスラエルを葦の海から旅立たせた」
 - ①ヘブル語の動詞 「ナサー」 ((天幕の杭を)引き抜く、出発する、移動する)
 - ②使役動詞の型 (to cause to set out)
- (2) イスラエルの民はなかなか動こうとはしなかった。
 - ①賛美に酔いしれていた。
 - ②エジプト軍から富を略奪することが可能となった。
 - ③エジプトに帰り、そこを征服する可能性さえ出てきた。
 - ④マタ 14:22 5千人のパンの奇跡の後の記事
- (3) モーセとイスラエルの民の認識の相違
 - ①信仰による判断

②肉による判断

③新約聖書の聖句

* I コリ 3 : 1

* I コリ 14 : 20

* ヘブ 5 : 13 ~ 15

④イスラエルの民は訓練を必要としていた。

2. 訓練

(1) シュルの荒野を3日間歩いた。

①3日間という言葉は、生死にかかわる時によく使用される象徴的言葉でもある。

②ホセ 6 : 1 ~ 2

「さあ、【主】に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちが打ったが、また、包んでくださるからだ。主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ」

③滅びの直前であっても、悔い改めるなら、【主】はすみやかに助けてくださる。

(2) 水が見つからなかった。

①【主】からの訓練である。

②エジプトに留まっていたなら、この訓練はなかった。

③民のつぶやきが聞こえてくるような気がする。

II. マラでの体験 (15章23節~26節)

1. 喜びの後の落胆

(1) マラの水は苦くて飲むことができなかった。

(2) 「マラ」とは苦いという意味。

2. 落胆の後のつぶやき

(1) モーセに対してつぶやいた。

(2) 3日前には、喜び踊った民が、態度を変化させた。

①習慣的つぶやきは、祝福を失い、裁きを招くことになる。

②イスラエルの民の失敗から学ぶ。

3. モーセの祈り

(1) 大牧者の下で働く小牧者の役割

①自分が大牧者になろうとしないこと。

②自分も羊の一員であることを認識すること。

③【主】に祈ること。

(2) 【主】からの答え

①一本の木 どういう木かは分からない。

②モーセはそれを水に投げ入れた。

③水は浄化された。

④木に力があつたのではなく、信仰が超自然的な神の力を引き出した。

* 民 21：9 青銅の蛇

* II列 2：19～22 エリコの水源の癒し

4. 【主】の訓練

(1) これは【主】からの訓練であつた。

(2) 「おきてと定めを授け」

①モーセの律法のような体系化されたものではない。

②次に出てくる【主】の命令と約束のことである。

(3) 命令

①【主】の声に聞き従う。

②【主】が正しいと見られることを行う。

③その命令に耳を傾ける。

④そのおきてをことごとく守る。

(4) 約束

①エジプトに下したような病気を下さない。

②「わたしは【主】、あなたをいやす者である」

* ヘブル語では「ヤハウエ・ロフェイハ」となる。

* 【主】の御名のひとつである。

③イスラエルが【主】に従順であるなら、祝福が約束されている。

④マラの水を癒したように、病が癒される。

III. エリムでの体験 (15章 27節)

1. エリムとは、「なつめやし」という意味。

(1) なつめやしがある所には、水がある。

(2) 完璧な休息所

① 12の泉

② 70本のなつめやし

2. 荒野の旅には、マラもあれば、エリムもある。

結論：このメッセージは、人生が旅であることを学ぼうとするものである。

1. 舞台裏について(神の御心)

- (1) 大きな文脈を確認しておく必要がある。
- (2) モーセとイスラエルの民の差はそこにある。
 - ①神は、自由の民を作ろうとしておられる。
 - ②神は、ご自身を礼拝する民を作ろうとしておられる。
 - ③神は、ご自身の計画を実行する民を作ろうとしておられる。

2. 旧約聖書の約束と新約時代のクリスチャンの関係について

- (1) この箇所「おきてと定め」は、イスラエルの民に語られたもの。
 - ①アブラハム契約は無条件契約である。
 - ②その約束に基づいて、彼らはエジプトを脱出することができた。
 - ③アブラハム契約の祝福に与るためには、従順になる必要がある。
- (2) イスラエルと教会とは別である。
 - ①イエスのことば ヨハ 16:33
 - ②パウロの祈りの例 II コリ 12:9
 - ③教会時代の原則 II テモ 3:12

3. この箇所の適用について

- (1) マラからエリムという順番が大切である。
- (2) ヘブ 12:1~13
- (3) ルツ 1:20

「ナオミは彼女たちに言った。『私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。全能者が私をひどい苦しみに会わせたのですから』」

- ①ナオミは「私の喜び」。
- ②マラは「苦い」。
- ③ルツ 4:13~17 は、ナオミにとってのエリムの体験である。
 - *ダビデの祖父に当たるオベデの誕生
 - *オベデは、仕える、僕、という意味。